



恋心のパラドクス







BanG Dream!
Fan Book
Lisa×Yukina

2019.3/31
アールワイゼロ





恋心のパラドクス

りょーちゃん

目次

第一章『マネージャーと歌姫』

どこの世界にも「選ばれたモノ」というのは確かに存在して、動物にしろ植物にしろ人間にしろ、ピラミッドの頂点に君臨するべく生まれたモノがいる。

例えば、動物で言えば飛び抜けて足が速かったり、植物で言えば飛び抜けて色が鮮やかだったり。一目見ただけで「特別」だとわかる何かを備えたモノはその個性に更に磨きをかけるために日々進化し続けている。自分が「特別」であり続けるために。

アタシの目の前にいる人物もそうだ。

レコーディングルームと繋がっているマイクから彼女の歌声が聞こえてくる。聞き慣れた声ではあるものの、何度聞いても魅了されるアルトボイス。力強い声のアタックとなめらかな息遣い。不思議と自然と頭の中に彼女の声が入り込んできて、次の瞬間には無意識にその歌詞を追いかけてしまう。

素人でもわかるだろう。

彼女の歌声は人を惹きつける「何か」を持っていると。

レコーディングルームにいる彼女は一通り曲を歌い終えると、ゆっくりとヘッドセットを外し髪をかき上げながら「ふぅ」と息を吐く。

――――『湊友希那』。

今、ウチのプロダクションで一番売れている女性アーティストだ。

あまり派手なメディア露出はしないけれど、その圧倒的な歌唱力から年代問わずあらゆる人気を誇っている。

容姿端麗。歌唱力抜群。天から才能という才能を与えられた彼女はまだまだ若手ながら人々から崇拝され、出した曲は軒並み大ヒット。先日行われたコンサートもチケットがわずか数分で完売するなど、時代のムーブメントを生み出している人物ともいえる。

そんな彼女の次なる新曲のレコーディングが今、まさに行われようとしている。

アタシはガラス越しに友希那の横顔を見つめる。

「サビにかけての声量、もう少しだけ抑えてみようか」

「わかりました」

プロデューサーの指示事項を赤鉛筆ですらすらと譜面に書いていく彼女の指先。時折自分の意見を挟みながら曲の解釈や伝え方、ブレスの箇所など細かく打ち合わせは進み、新曲の最終的な完成図が描かれていく。最初こそ考える仕草が多いように見えたけど、自分なりに曲の解釈に納得できたのか彼女の表情は柔らかくなりつつある。

（綺麗だなぁ……）

友希那の横顔を見ながら純粋にそう思う。

普段の彼女はきりっとした表情で周りを寄せ付けないオーラがあるけど、ひとたび懐かれればその仮面は容易く剥がれてしまう。現に、プロデューサーとのやりとりも昔の頃とは全然違い、微笑みを交えた横顔はまるで完成された美術品のように感じる。人が成長していく姿を見るのは嬉しいことなんだけど、なんだかちょっぴり寂しいような不思議な気持ちになる。

変だな、アタシ。

「マネージャーさんからは何かありますか?」

「え……? ……アタシ……ですか……?」

「そうですよ。湊さんのマネージャーさんはあなたしかいないでしょう? 今井リサさん」

ぼうっと彼女の横顔に見惚れていれば、プロデューサーから飛んできたまさかの問いかけ。もちろん自分なんかに質問が飛んでくることは想定していなかったので、間抜けな声が部屋に響いてしまう。

友希那はそんなアタシを視線の中央に捕らえると、今までの笑顔とは比べものにならないくらいの満面の笑顔でくすっと微笑む。

「!」

その表情を見た瞬間、自分の体温がぐっとあがった気がした。心臓が激しく上下する。

(やばい……)

どくん、どくんと力強い鼓動を刻む胸に手を当て、周りに気付かれないように深く深呼吸をする。

落ち着け。落ち着け……。脳に命令を下す。しかし、鼓動はやむどころかむしろ激しくなってくる。

全く鳴りやむ気配のない鼓動にとうとう耐えきれなくなったアタシは、苦し紛れに「と……とくにないです!」と答え、逃げ出すようにレコーディング室から抜け出す。

彼女の柔らかい視線を未だに背中に感じた気がするけれど、今はそれどころではない。アタシは廊下に誰もいないことを確認するとダッシュでトイレへ駆け込み、倒れるようにして個室の便座に座り込む。もちろん鍵を閉めることも忘れてはいけない。

「なっ……なんなの、あの表情。……あんな笑顔反則だよ……」

先ほどの友希那の微笑みが頭の中をリフレインする。

顔が熱い。

胸のドキドキが止まらない。

身体に力が入らない。

彼女はウチのプロダクションの大切な『看板商品』であって、アタシはその『専属マネージャー』。看板を傷つける輩を排除しなければならない身。

だからこそ、こんな気持ちを彼女に抱いてはいけないのに……。

アタシは首から提げた『マネージャー』という肩書きのついた名札をぎゅっと握り、大きくため息をつくしかなかった。

◇◇◇

アタシと友希那の出会いは約二年前。まだアタシが『マネージャー』の『マ』の字も知らない時だった。

都内某所の一等地に建物を構える『弦巻プロダクション』。

元々アタシはこのプロダクションに所属するタレントの『メイク担当』として働いていた。

小さい頃からかわいい物を集めるものが好きだったし、かわいい物を身につけるのも大好きな性格だったアタシ。その熱は

年齢を重ねても収まるところを知らず、高校に上がる頃には人の髪の毛をアレンジしたり、メイクをやってあげたりすることも日常茶飯事だった。

自分の手で誰かが綺麗になって、そのことに喜んでくれることは純粋に嬉しかったし、そのことにやりがいを感じるようになったのもちょうどその頃だったと思う。高校三年生の時に立ちはだかる「進路」という壁に直面した際も、迷うことなくメイクの道を選ぶことができたのも、今思えば必然的だったのかもしれない。

自分でいうのもちょっと恥ずかしいけれど、小さい頃から興味があった分野ということもあってかメイクの技術は他の人よりも飛び抜けていた。そのお陰で、進学した専門学校でも技術面での評価はすこぶる良く、卒業後は講師の先生の紹介で今の『弦巻プロダクション』にメイク担当として就職する運びになった次第だ。

もちろん、就職後のアタシもとくに苦労することもなく毎日を過ごしていた。

さすがに就職したての頃は、メイクを施す相手が芸能人ということもあってガチガチに緊張することも多かったけれど、場数をこなすにつれて「その人物が何を望んでいるのか」、「どんなメイクだったらその人を一番輝かせることができるのか」ということが自然とわかるようになっていった。

年数を重ねればアタシを名指しで指名してくれる人が現れたり、カメラマンさんから「写真映えがするメイクだね」と褒められたりすることも増え、少しずつだけど自分の腕が認められていっていることを肌で感じることができたし、やりがいもあった。

「アタシはこれからここでたくさんの人を笑顔にできる一流のメイクさんになる」。直感でそう感じていた。そんな未来を信じて疑わなかった。

でも、その矢先に事件は起こった。

「えぇえぇ! アタシが……マネージャーに?」

「そうなの。お願い! もう頼めるのは今井さんしかいないの!」

そういって深々と頭を下げてくるのはプロダクション内のマネージャー業務をまとめている先輩社員のまりなさんだ。人柄もよく、TV局関係者からも大評判のベテランマネージャーで所属タレントからの信頼も高い。そんな彼女がアタシに頭を下げている。

これは異様な事態だ。

彼女から詳しく話を聞くと、どうやら最近プロダクション内で大量に新人タレントや新人アーティストをスカウトしたらしく慢性的なマネージャー不足に陥っているらしい。まりなさん含む既存のベテランマネージャーが複数のタレントを受け持つ形で必死に対応しているみたいだけど、やはりそうはいかないタレントさんもいるとのことで。

「湊……、友希那さん……?」

「そう。今ウチで絶賛売り出し中のアーティストで、今までは私が他の子と兼任しながら担当してたんだけど、別の子の面倒もみなくちゃいけなくなっちゃって……。湊さんはこれからが大事な時だからどうしても専属のマネージャーが必要なの。でも、この子ちょっと変わっていてね、私以外の年上の人間には

あまり心を許してくれないのよ」
　まりなさんは少しだけ哀しそうな顔をすると、次の瞬間にはアタシの手をぎゅっと握ってくる。
「今井さんなら湊さんと歳も同じだし、世話焼きなところとか彼女にぴったりだと思うの！　ね！　お願い！　彼女の専属マネージャーになって！　ていうか、もう社長の決定事項なの！　ほんと急でごめんなんだけど、お願いします！」
　そう言って突きつけられる「人事異動」という文字の書かれた紙切れ。
　どうやら今回の異動でアタシ以外にも色んな部署の人がマネージャー業務をすることになっているようだ。
「もちろん当分の間は私も出来る限りフォローするから！」
「はぁ……。まぁ、アタシなんかでよければ全然やりますけど……」
　正直、突然すぎる人事異動で頭が混乱しているものの、下っ端のアタシに拒否権はなく、既に印刷された新しい名刺や名札、マニュアルが次々と机の上に置かれていくのを只々見つめるしかない。
　最後には「これが湊さんのプロフィールね。彼女、完璧主義者だから最初は取っつきにくいかもしれないけれど、慣れてきたらそんなところも可愛くみえるようになってくるから」なんて満面の笑みで『湊友希那ファイル』なるものを渡され、あれよあれよと引継業務が行われていく。
　アタシ、ほんとにマネージャーになるんだ……、そう思いながら湊さんってどんな人なんだろうと試しにファイルを一枚めくってみれば彼女の宣材写真が目に入る。
　綺麗な銀髪に透き通るような肌。華奢な体に反してその瞳に持つ力強さは見る者を惹きつける何かを感じる。
　一言で言えば、オーラがある……と言えば良いのだろうか。
「………」
「彼女、不思議な魅力があるでしょ？　笑ったら最高に可愛いんだけど、カメラの前では全然笑ってくれないのよね」
　そう言いながらまりなさんは笑う。
　確かに彼女の写真はまじめな表情が多く、あまり笑っている写真はない。この写真だけで第一印象を決めるなら、少し怖い人という印象だ。
　けれど今のアタシにそんなこと言っている暇はない。なんたって相手は今売り出し中の大切なアーティストなのだ。言ってしまえば彼女を今後活かせるかもアタシにかかっている。生半可な気持ちでいてはいけない。
　アタシは机の中から手帳を取り出すと、まりなさんの語るマネージャーという職についてのアドバイスや彼女のプロフィールをびっちりと書き込み頭に入れる。
　名前は湊友希那。誕生日は十月二十六日。はちみつティーが好きで苦い物が苦手。歌に関しては非常にストイックで妥協を許さない一方、日常的な生活面では少し抜けているところもある……、と。
　半年前にウチのプロダクションが彼女の歌声に惚れ込み即スカウト。その圧倒的歌唱力からすぐにデビューを果たし、先日記念すべき二枚目のCDを発売。曲は大人気ドラマの主題歌にもなっていて、初週から今日に至るまでオリコンチャートトップ十にランクインし続けている……、らしい。

（……ん？　この大人気ドラマって……）
「あー！　アタシこの曲知ってます！　これ月九のやつですよね？　タムタクとヴァッサーちゃんが出てるやつ！　この曲、湊さんの曲だったんですか？」
「そうだよー。彼女、今までほとんどテレビ露出はしてないから今井さんみたいに彼女の顔や名前と歌が一致しない人も多いんだよねぇ。まぁ、将来的には積極的にメディア出演して欲しいっていうのが社長の希望だから、そこは慣れていこうね」
「……わかりました」
「へ……？」
　まりなさんがアタシの後ろにいるらしい人物に向かって微笑む。そして聞こえてくる聞き慣れないアルトボイス。
　手帳に必死に書き込んでいたアタシは反応するタイミングが少しだけ遅くなってしまい、慌ててその声の主の方向へ振り返る。
「！」
　瞬間、スローモーションのように世界が動いたと思った。
　長い髪の毛を揺らめかせ、じっとこちらを見てくる宝石のような瞳。
（――――この人が……）
　そこには先ほどまで見ていた宣材写真と全く同じ表情をした人物が立っていた。
「初めまして。湊友希那です。まりなさん、この人が……？」
「そうだよ。この人が今日から新しく専属マネージャーになる今井リサさんだよ」
　ぼけーっとする意識の端っこでまりなさんが彼女にアタシのことを紹介してくれる声が聞こえる。
「今まではメイク担当でマネージャー業務は初めてだけどしっかりしてる人だから安心して」、というアタシの簡単なプロフィールや、「困ったことがあればいつでも相談してほしい」という旨を説明していくまりなさん。目の前の人物はまりなさんの言葉にうなずいたり、時折微笑んだり。さっきまで見ていた写真の表情とは全然違う顔をする彼女に、本当にこの人が湊さんなのだろうかと思ってしまう。
（綺麗な人……）
「……とまぁ、こんな感じだから二人で仲良く頑張っていってね！　……って、あれ？　今井さん、大丈夫？　聞いてる？」
「え……？」
　………やばい。聞いてなかった。
　もちろん「湊さんの表情に見惚れてました」なんて言えるわけもなく、ただただ頭を下げることしかできないアタシ。
　とりあえず何か挨拶でもしておかないと！
「えっと、は……初めまして！　アタシ、今井リサっていいます。本日から湊さんのマネージャーになりました。初めてのマネージャー業務で至らない点も多いと思うので何かあればすぐに言ってくださいッ！」
　わたわたしながらも何とか自己紹介はできた。湊さんはそんなアタシをじっと見つめてくる。まるで品評会の品物を見定めるような瞳で。
「……あの、アタシ……湊さんにアタシがマネージャーで良かったって思ってもらえるように頑張ります。まだまだ右も左もわからないけど、それだけは絶対に約束します。だから……、

その……」
緊張してうまく言葉が出てこない。
おかしいな。コミュニケーション能力だけは人よりも優れていると自負していたのに。
「あー」とか「うー」とか言いながら何とか次の言葉を探していると、目の前の湊さんが口を開く。
「……あなたは、私に全てを賭けてくれる？」
「……え……？」
真剣な眼差しがアタシを射貫く。
「私は私の進むべき道があって、そこに向かってただひたすら駆け上がっていくだけ。あなたはそんな私に全てを賭ける覚悟はある？」
「……！」
静寂が世界を包む。まるでこの瞬間だけは世界にはアタシ達二人しかいないような、そんな感覚。
でも、その瞳は静かにアタシの答えを待っているようだった。
「……」
「アタシは……」
正直彼女の質問の意図はわからない。彼女の言う「全て」っていうのもアタシの思う「全て」と同じなのかもわからない。
でも、直感で感じた。
アタシはこの人のために全てを賭けてみたいと。今井リサの人生の全てを賭けて彼女を輝かせてみたいと。いつか二人で誰も知らない頂点の景色を見てみたいと。
「賭けるよ。全部……。全部友希那にあげる」
ほぼ無意識に出た言葉だった。

アタシの答えに彼女は一瞬驚いた顔を見せたが、次の瞬間にはニッと口角をあげ、「妥協は許さないわよ。リサ」と微笑んだ。
それからの日々はあっという間だった。
まりなさんの言う通り、彼女は歌に関しては超がつくほどシビアだけど日常生活は全然だめ。放っておくとコンビニ弁当や外食ばかりの偏った食生活を送るし、部屋はすぐ汚くする。米は炊けない、洗濯機も回せない。洗い物をすれば絶対に食器を割る。そんな生活能力ゼロの彼女が暮らす家に足を運ぶこと多数。彼女の両親は多忙を極め、滅多に家にいないことも多かったので、早朝から仕事がある日は前日から彼女の部屋に泊まり込みをすることもあった。
そんな生活のおかげか、最初こそアタシは彼女のスター性に恐縮している部分もあったけど、きちんと「友希那のそういうところは駄目だと思う」なんて意見も言えるようになったし、彼女もアタシの意見に「リサの言うとおりね。善処するわ」と返してくれるようになった。
友希那のアーティストとしての活動も順調で、まさに順風満帆。
何も問題はなかった。
そう、彼女には何も問題はなかった。
問題があったのは他でもない。アタシのほうだった。

◇◇◇

「はぁ…」
トイレの個室内で再び大きなため息を漏らす。
（おかしい。こんなはずじゃなかったのに…）
彼女のマネージャーになって約二年。最初の頃は彼女の顔を見るたびにドキドキするのは慣れないマネージャー業務のせいだと思っていた。彼女の新たな一面を知るたびに一喜一憂する自分がいるのも、きっと手負いのネコが懐いてくれるようになった時に感じる親心のようなものだと信じて疑わなかった。
でも、彼女へのドキドキは時を経ても収まることはなく、日々膨らみ続けている。
今日だってそうだ。先ほどのレコーディング室での彼女の微笑みはやばかった。長いまつげ、くっきりとした二重、優しげな瞳……。
思い出すだけでも胸がぎゅうぅっと苦しくなる。
本当にどうしてしまったんだろうか。こんな調子でアタシは友希那のマネージャーを続けることなんてできるのだろうかとさえ疑ってしまう。
ため息をつきながら腕時計を確認すれば、そろそろレコーディングルームへ戻らないと怪しまれそうな時間だった。
アタシは両手で自分の頬をばしっとたたくとトイレの個室を出る。鏡に映った情けない自分の顔。ほんと、なんて顔してんだか。
（しっかりしろ！　今井リサ！）

深く深呼吸を一回すると、自分を鼓舞しながら急ぎ足でレコーディングルームへ戻る。その道中、頭の中では「友希那は商品、アタシはマネージャー……」と戒めの呪文を唱え続けた。
「遅いじゃない。どこへ行っていたの？」
アタシがレコーディングルームへ戻ると既に収録は終わっていたようで、部屋にはソファーでくつろぐ友希那しかいなかった。彼女は少し怒った顔をしながらソファーの空いている空間をベシベシとたたく。どうやらそこへ座れということらしい。
「ごめん。ちょっとお腹の調子が悪くて…」
アタシは希望通り彼女の隣の席へと腰掛ける。そうすれば間髪開けずに右肩に重みを感じる。収まったはずの胸の鼓動が再びざわつき始める。
「ゆ……友希那？」
「変な人に声かけられてない？　最近のリサは放っておくとすぐ色んな人にちょっかいをかけられているから心配だわ……」
友希那はそう言いながらアタシの鼻先に人差し指を突きつけてくる。
「いい？　リサはあの日私に全てを賭けると言ってくれたのだから、私以外のモノにうつつを抜かしては駄目よ。脇道逸れずに私のことだけを見てればいいの。わかった？」
「ハ……、ハイ！」
（なんだろう。今なんだかすごいことを言われたような……）
友希那はアタシの返答に満足気味に微笑むと「今日は疲れたわ……。十分だけ寝させて頂戴」と言ってアタシの膝に頭を乗せてくる。

え？　と思った時には既に遅し。
歌姫はアタシの膝を枕代わりにしてすやすやと夢の中へ。さりげなくお腹に手を回されるというオプション付きで。
「おーい、友希那……？」
「…………」
「もー、ほんとに寝ちゃったわけ？」
「…………」
やれやれ、と思いながらも自然と上がってしまう口角。
もう自分でもわかっている。何度も駄目だと言い聞かせてるけどきっと抑えられそうにない。
(多分アタシは……、友希那のことが好きだ)
歌に対してストイックなところも、普段は何もできないところも、自分の気持ちに不器用なところも。彼女を知れば知るほどこの気持ちは加速していく。この気持ちは決して抱いてはならないものだとわかっているけど、好きになってしまったのだからしょうがない。
アタシは人の膝の上で無邪気に眠る彼女の髪の毛をなでると、そっと頬に指を沿わす。この子はきっとアタシの気持ちなんて全然知らずに眠ってるんだろうなぁと思うと少しばかり切なくなる。
でも、彼女はこれからうちのプロダクションの看板を背負っていくべき人物。アタシは彼女をあらゆるモノから守らなければならない身。
悲しいけれど、それが現実なのだ。
もちろん、一番最初に出会った頃にアタシが友希那に宣言した言葉に嘘偽りはない。アタシがマネージャーで良かったと友希那に思ってもらいたい。その想いがあるからこそ、アタシは彼女に全てを賭けると誓った。
だから、この気持ちも絶対に隠し通してみせる。
アタシは彼女にとってたったひとりの「専属マネージャー」なのだから。
アタシは眠る彼女の髪の毛を指先でなぞると、その髪をゆっくりと耳にかけてあげる。
いつもよりあどけない寝顔。
その表情を見て、この人を守りたいと思う。
強く、つよく。
「好きだよ。友希那……。いつかこの気持ちを伝えれる日が来たらいいなぁ……、なんてね……」
誰に聞かれるわけでもなく無意識に呟いた言葉。
まさかその言葉をアタシの想い人が聞いてるなんて、その時のアタシは思ってもいなかった。

第二章『歌姫とTV収録』

「それでは、本番行きます！　五、四、三、……」

眩しい照明。

ピンと張った空気。

響く声。

ディレクターの示す指がスローモーションのように三本、二本、一本と変わっていく。その合図とともにその場にいた全員の顔が一気に真剣になる。

先程までの騒がしかった空気は無い。一瞬の呼吸の乱れさえも許されない。あるのは、張り詰めた緊張感のみ。

もちろん、アタシの担当している友希那も例外ではなかった。

先程まではそわそわした様子でアタシのことを見たり、ぼうっと髪の毛を弄ったりしていたけど、今は落ちついた表情でステージ中央のカメラを静かに見つめている。直前に無言で前髪を整える男性アイドル、進行表を何度もチェックする司会者、最後の瞬間までマイクチェックに励むスタッフ。時間の過ごし方は違うけど、その場にいる全員の気持ちはただ一つだった。

『最高の本番を』

そして、ディレクターの手元のカウントがゼロになった瞬間、タイトルコールとともにお馴染みの曲が流れ、カメラが一気に司会者へと寄る。

（ついに、始まった……！）

ここは都内の某テレビ局内にあるスタジオ。

今日はこのスタジオで、とある『テレビ番組』の収録が行われようとしている。

大きな防音扉、吹き抜けかと勘違いしてしまいそうなくらい高い天井、大きな液晶に映るタイムスケジュール。普段あまりこのような場にくることがないアタシは目にするもの全てが新鮮で度肝を抜かれそうになる。

（下手に触って壊したらやばいよね……）

このスタジオは他のテレビ局に比べると、恐ろしいほどの広さがあると評判で、それを無言で示すかのようにスタジオの中には複数のセットが所狭しと組まれている。

セットの内訳を大きく分類すると「出演者が座るゲスト席」、「歌を披露する華やかなステージ」、「ステージを盛り上げるために用意された豪華な客席」の三つに分かれている。噂には聞いていたけど、改めて実物を目にすると「すごい」の一言しか出てこない。

これだけでもうおわかりだろうか？

そう。今アタシの目の前に広がるおびただしいセットは、毎週金曜日の二十時枠、大人気の某音楽番組のもの。その撮影がちょうど始まったのだ。

アタシ自身は出演者ではないけれど、独特の空気感に心臓が痛いくらいドキドキしている。だって、この番組の何よりのウリは『生放送』であることだから。

ほんの少しの時間のズレも許されない生放送。そのため、スタジオ内の至るところにタイムボードが置かれている。

（それにしても……）

あのテレビ嫌いの友希那がまさか生放送に出演してくれるなんて……！　友希那の横顔を見つめながらそう思う。

きっと周りの皆も驚いていると思うけど、それ以上にアタシが一番驚いている。正直なところ、今だってこの光景が嘘みたいなんだから。

アタシは自分の頬を引っ張ってみる。うん。痛い。アタシはジンジンする頬っぺたを撫でながら、カメラの前でバッチリとキメ顔をする友希那を見つめる。

緊張なんて微塵も感じさせない表情。年齢よりも大人びた雰囲気。

そこには完璧な『湊友希那』がいた。

ことの発端は遡ること二週間前のことだった。ウチのプロダクション内で売り出し中のアイドルグループのメンバーが練習中に怪我をしてしまったことから全ては始まった。

「……音楽番組の生放送？」

「そう。出演予定だったアイドルの子が怪我でドクターストップかかっちゃったみたいで……。で、番組の制作サイドからその空いた枠で友希那の新曲を披露してほしいっていうオファーが急遽入ったんだ～。でも、友希那ってテレビ出演にまだ抵抗あるよね……？　その、全然無理強いとかはしないから友希那がイヤなら断ってもらって――――」

「いいわ。出るわ」

「うんうん、だよねぇ。イヤだよねぇ………」

――――え？

断られることを前提で喋っていたため、彼女の返答にしばし停止する脳みそ。

（……え？　幻聴？　なんか今、出るって聞こえたような……？）

戸惑いながら友希那を凝視していれば、再度「出るわよ」という言葉を返される。

「！」

嘘でしょ？　だって、あの友希那が……？　しかも生放送だよ？

「ど……、どうしたの友希那！　アタシの話ちゃんと聴いてた？　テレビ出演だよ？　しかも生放送！　わかってる？」

「……どうしたのよ、リサ。それはさっきも聞いたわ。その音楽番組で新曲を披露するんでしょう？　何回も言わなくてもわかっているわ」

「…………」

本当にどうしたというのだろうか。明日空から槍でも降って来るんだろうか。

友希那は「一体どうしたのよ」と不思議そうな顔でこちらを見てくる。

いやいや、だって、……ねぇ？

「ほんとにいいの？　あとからやっぱりやめるとか言っても、もうやめれないよ？　生放送だから編集とかできないよ？」

「わかっているわ。自分の言ったことにはきちんと責任を持つ、それがプロでしょう。テレビには出るし、生放送であることも理解しているわ。リサは何も心配しなくていいから、ね？」

友希那はそう言うと戸惑うアタシの頭を撫でながら優しく微笑む。

キリッとした眉毛が一瞬だけ弧を描き、口元には柔らかな笑み。その微笑みに熱を持っていくアタシの頬。

「っ……！」

ダメダメ！　ときめくな、アタシ！

まるで恋人に微笑むような優しげな表情にぎゅっと心臓が摘まれたような感覚。友希那は決してそういうつもりでアタシのこと見てるわけじゃないのに。

「じゃ……じゃあ、出演オッケーってことで話進めとくからね！」

アタシは嘘をつけない自分の身体を誤魔化すように慌ただしくスケジュール帳に音楽番組の予定を書き込む。

友希那はそんなアタシを見ると再びクスリと笑みをこぼす。

「リサ」

「なに？」

「くれぐれもテレビ局で変な人についていってはダメよ」

「ちょ……、なにそれ。ついていくわけないでしょ！　アタシは友希那のマネージャーなんだから、友希那の側から離れるわけないよ！」

「ふふ、そうね」

友希那は相変わらずアタシの髪の毛を撫でてくる。時々肌に触れる指先がくすぐったい。

「っ……………」

子供扱いしないでよー、なんて言いながら手帳越しに盗み見た友希那の表情は相変わらず優しげで……。その表情ひとつで、単純にときめいてしまうアタシの心。

アタシは赤い顔を見られたくなくて必死に手帳で文字列を綴ることしかできなかった。

（うう……、落ち着けアタシ！　アタシは友希那のマネージャーで、友希那だってただ単にマネージャーであるアタシを慕ってくれてるだけであって……。それ以上の感情はないんだから！）

でも……。

最近、友希那はとても優しく笑うようになった。

以前もごく稀に（猫を見たときとか）微笑むことはあったけど、それとは比にならないくらい慈愛に満ちたような顔を見せてくれることが増えた。とくに二人きりの時に見せてくれる笑顔は他の人に見せたくないくらい本当に可愛くて、不意打ちでそんな顔見せられると心臓がいくつあっても足りないくらいだ。

なにか良いことでもあったんだろうか。

もしかして、アタシの知らないうちに嬉しいことがあったの？　声の調子が良いとか？　今日の運勢が一位とか？　まさかとは思うけど、好きな人でもできちゃったとか……？　いや、まさかそんな。

彼女が笑ってくれる理由を知りたい。

あなたが私に微笑む理由の一つに、少しでも「アタシ」が含まれてたら良いのにって、いつも思ってることを、あなたは知ってる？

友希那が生放送に出る旨をテレビ局にオッケーするや否や、瞬く間に『湊友希那 満を持して音楽番組に出演決定！！』というニュースが流れた。

なにが彼女の心を駆り立てたのだろうか。

どういう心境の変化が起きたのだろうか

[illegible]みんなが噂するけど、[illegible]者はいない。もちろんアタシだってそうだ。でも、今まで頑なにテレビ出演を断ってきた彼女が自ら出ても良いと言ってくれたのには、きっと彼女なりの考えがあってのことだろう

彼女だってプロだ。生半可な気持ちで決めたわけではないということはわかる。友希那がそうだと決めたことは、何が何でもフォローする。それがマネージャーであるアタシの務め。ならば自分のなすべきことは自ずと見えてくる。

プロダクション内の方針でも友希那のテレビ出演を増やすことが長期的戦略目標に掲げられているし、これを機に彼女のテレビ出演が増えれば友希那のファンも喜ぶはず。もちろんアタシだって嬉しい。彼女のことを誰よりも応援しているファンって言えるくらい、彼女の声に惚れ込んでいる一人だから。

一人でも多くの人に、友希那の声を聴いてほしい。好きになってほしい。応援してほしい。その思いでひたすら駆け抜けてきた。今だって、これからだって、ずっと。だからこそ、アタシはひとまず今、自分のできることをしよう。

些細なことでも良い。どんなことでも良い。その全てがきっと明日のアタシと友希那に繋がっているはずだから。

（とりあえず、今日は家に帰ったら友希那の好きなクッキーを焼こうかな……）

少しでも彼女の力になりたい。

少しでも彼女に笑ってほしい。

友希那のことが好きだとか、あわよくば彼女にもっと近づきたいとか、下心がないと言われればきっとウソになるけど、マネージャーとしてアタシを慕ってくれる彼女にただ笑っていて[illegible]描[illegible]彼女の[illegible]理解者[illegible]普通のマネージャーでは終わりたくない

「がんばろうね、友希那……」

アタシは瞼の裏に残る愛しい人の残像に、そっと語りかけた。

そして迎えた本番当日。

なぜか真昼間から事務所で社長直々に盛大な出発式をおこなってもらい、友希那と二人で急いで収録会場へと向かう。

「なんだったの、さっきのは……」

猫の被り物をつけられた友希那が怪訝そうな顔でこちらを見てくる。

「あはは……。きっとみんな友希那のこと応援してるよってことだと思うよ」

アタシもプロダクションのPRキャラクターであるミッシェルのお面を頭につけながら苦笑する。

急ぎ足で駐車場へ向かえば、一つだけポツンとある普通乗用車。今日はお抱えの運転手さんが不在のため、アタシの運転で収録会場であるテレビ局へと向かうことになる。

友希那が後部座席に座ったことを確認すると、アタシも急いでギアを入れる。

「会場についたらすぐにリハーサルして本番になるから、歌詞とかのチェックは今しといてね」

「わかったわ」

友希那は片耳にイヤホンをさしながら、レコーディングの時

から使用している歌詞カードをカバンから取り出す。デビュー当時からの友希那の癖。どんなに綺麗な譜面を用意しても、結局はレコーディングで使っていたボロボロの歌詞カードを持ってくる。彼女曰く、願掛けみたいなものらしい。きっと、その時に感じた気持ちとか、書きなぐった汚いメモとか、言葉では言い表せない感情がその歌詞カードには染み込んでいるんだろう。

ミラーで後ろの様子を確認するとアクセルを踏む。車はゆっくりと進み、車道へ出る。アタシは安全運転を心掛けながらも、なるべく早く会場へと着く道を選ぶ。道もそんなに混んでいないのでこれなら予定通り会場入りできるだろう。

ほっと息を吐く。

「あ！　そうだ。忘れてたけど、友希那にクッキーを焼いてきたんだ！　後ろに積んであるアタシのカバンの中に入れてるから、小腹が空いたら食べてね！」

アタシがミラー越しに彼女へと視線を送れば、はぁぁあっと顔を輝かせる友希那。隠しきれていない満面の笑みに、心臓がきゅんとなる。

「ご……、ごほん。まぁ、今ちょうど小腹が減ってなくもないから、少しいただこうかしら」

声だけは冷静を装っているようだけど、口元の笑みは隠せていない。どちらかというとだらしない表情がミラー越しにきちんと映っている

（ほんと、可愛いなぁ……）

アタシは嬉しそうにクッキーを頬張る彼女の見ながらそう思った。

◇◇◇

「今井さん」

予定通りにテレビ局に到着し、友希那のリハーサルの様子を確認しつつ、メールで別件のタイアップ企画の経過報告をしていれば、後ろから声をかけられる。誰だろう、と振り向けばそこには見知った顔が一人。思わず飛び上がってしまう。

「あれ？　紗夜じゃん！　どうしたの？　こんなとこで！」

そこにいたのは同じ弦巻プロダクションに所属しているタレントの一人、氷川紗夜だった。

「隣のスタジオで撮影があったんです。先程無事終わったのでこれから一旦事務所に帰るところだったのですが、お二人がここにいると聞いたので見学にきました」

紗夜は現在トップモデルとして活躍しているウチのプロダクションの稼ぎ頭。デビュー当時にアタシが紗夜のメイク担当をしていたこともあって、今では気兼ねなく話せる仲の一人だ。困ったことがあればお互いに相談するし、時間があれば飲みにいったりもする。なんていうんだろう。紗夜と友希那ってちょっと似てる気がするんだよね。こう、周りを寄せ付けないオーラとか、懐かれるととことん慕ってくるところとか……。なんて言えば二人とも怒るんだろうけど。

「湊さん、今日はテレビに出演されるそうですね。しかも生放送番組。スタッフの皆さんが珍しいことだと声を揃えて言っていました」

紗夜はそう言いながら微笑む。

[illegible]思わなかったから、アタシも未だにびっくり！　ここに来る前にも社長直々の出発式があって、ほんとなんていうか……驚きの連発だよ」

「ふふ。これも今井さんのおかげですね。今井さんが湊さんのマネージャーになってから、湊さんの雰囲気が少し柔らかくなってきたように感じます。前よりも話しかけやすくなったと評判ですよ」

「そ……、そうかな？　毎日一緒にいるとあんまりわかんないんだけど、そうだったら本気で嬉しい！」

他の人から同じことを言われてもきっと社交辞令なんだろうなって思うけど、自分が本当に信頼している人物からそう言われると嬉しい。それに、自分の大切な人が誰かに褒められるというのもなんだかくすぐったい。それが自分の影響だというのならなおさら。

「そういえば最近ヒナはどう？　怪我は大丈夫そう？」

くすぐったい気持ちを誤魔化すように、紗夜へ強引に質問を振る。

「ええ。最初は随分と落ち込んでいましたが、最近は早く復帰したいとうるさいです」

紗夜には『氷川日菜』という双子の妹がいて、元々はその子の所属する『Pastel*Palettes(通称:パスパレ)』いうアイドルグループがこの音楽番組に出演する予定だった。その出演をキャンセルする原因になったのが氷川日菜の怪我だった。

なんでも、新曲の練習中に立ち位置を間違えて他のメンバーと接触し、全治一ヶ月の足の怪我を負ってしまったらしい。

[illegible]

[illegible]った体調が優れない時だったのかもしれない

姉としてそのことに責任を感じているのか、紗夜が申し訳なさそうな顔をしてくる。

「日菜のせいで今井さんや湊さんにご迷惑をかける形になってしまい申し訳ありません。日菜が復帰した際には改めて二人でお詫びに伺いますので……」

「もう、紗夜ったらそんな固いこと言わなくていいから。友希那も紗夜もパスパレもジャンルは違うけど、デビュー時期が同じだから同期みたいなものじゃん？　困った時はお互い様だよ。友希那がテレビに出ない分、ハスパレにはたくさんテレビに出てもらってるし、雑誌にだって出てもらってる。それはきっと友希那だって同じ気持ちのはずだよ。苦しい時の気持ちも、嬉しい時の気持ちもすっごく理解できる。自分のミスで他の人に迷惑をかけることの責任だって知ってる。だからこそ、今回のオファーも快く受けてくれたんだと思うよ。だから気にしないで、ね？」

「今井さん……はい。ありがとうございます」

そのあとも紗夜と最近の出来事や最近できたオシャレなカフェの話をしていれば、リハーサルを終えた友希那がこちらへやってくる。

「あら、紗夜じゃない」

「湊さん！」

紗夜は友希那の姿を見るや、目さに駆け寄り、先程同様に長々とお詫びと今回の件での感謝の挨拶を述べ出す。見学、な

んて言ってたけどきっとこのためにわざわざ足を運んでくれたんだろうな、と思う。紗夜のそんな真面目なところが、アタシは好きだ
紗夜は一通り喋ると満足したのか「本番、頑張ってくださいね！」と言ってスタジオをあとにしていった。
「ほんと真面目ね、彼女」
「あはは、ほんとだよね～」
そういえば、紗夜は去り際に友希那の耳元で何かを言っていたみたいだけど、何を言っていたんだろう。残念ながらアタシには聞こえなかったんだけど、なんだかアタシの名前が聞こえたような気もしなくもない。会話後の友希那の顔が少しだけ赤いのもなんだか気になる。
「どうしたの？　友希那。なんか顔赤くない？」
「なっ……なんでもないわ。それよりも、本番まで少し時間があるから楽屋へ戻りましょう。いい？　変に出歩いてはダメよ。テレビ局には悪い魔物がいるんだから」
「魔物？」
「と、とにかく！　本番まではリサと二人きりで過ごしたいの。わかった？」
「っ……、……うん」
おそらく友希那はいつも通りリラックスしたいという意味で二人で過ごしたいと言ってくれたんだろう。
友希那は初対面の人が苦手だ。変に気を遣うのも気を遣われるのも嫌なんだと思う。それに比べたら、マネージャーのアタシと二人だったら気を遣わなくても良いし。
でも、『本番までの時間はリサと二人で過ごしたい』なんて、そんな可愛いこと言われちゃうと勘違いしちゃうじゃん。そういう意味でアタシと二人でいたいって、思ってくれたのかなって。
「リサ、どうしたの？」
「う、ううん！　なんでもない！　本番まで楽屋でゆっくりしよっか！」
楽屋に戻ったアタシ達は特になにをするわけではないけど、思い思いの時間を過ごしつつ、本番までの時間を待った（もちろん友希那に言われた通り、出歩くのはやめた）。
そして迎えた本番。
衣装に着替えてバッチリ本番モードになった友希那にありったけのエールを送ると、アタシは急いで客席のあるセットの裏へと走る。友希那には「楽屋のモニタから見守っていて」って言われたけど、どうしても彼女の勇姿をこの目に収めておきたかったから。
コッソリと客席後ろのセットに潜り込むと、足音を立てないように、ゆっくりと足を忍ばせる。
（目立たないように、目立たないように……）
たぶんこの場で誰よりも緊張しているのはアタシだって思うくらい心臓と胃が痛い。だって念願のテレビ出演だもん。
「さぁ、始まりました、Nステーション！　最初のアーティストはこの方！」
司会者が本日の出演者の紹介をしていく。まずはトップバッターのアーティストから。披露する曲に関する質問から最近の出来事などおおよそリハーサル通りの質疑応答が繰り返されていく。その背後では複数のスタッフさんによってセットが組み

向かい[illegible]
[illegible]
友希那も打ち合わせ通りの完璧なトークを見せていて安心する。凛とした横顔は他のアーティストにも全然引けを取らないというより、フィルターがかかっているのかもしれないけど、彼女の周りだけ空気が違う気がする。
やっぱり、友希那ってすごい。改めてそう思う
「すごいオーラだね、彼女。隣、いい？」
客席の後ろでチラチラと友希那の成長を噛み締めていれば、不意にアタシに話しかけてくる一人の人物。パリっとした青のジャケットに白のパンツ、靴は高そうな皮素材を履き、髪はワックスで綺麗に固められている
「？」
見れば首に「スタッフ」と書かれた名札をぶら下げていることからこの番組の関係者だということはわかる。でも誰だっけ？　目元のほくろが印象的だけど見覚えある人なんていたかな？　なんて思いながら記憶を辿ろうとするけど、よく思い出せない。というより、もしかしたら初めましての人かもしれない。
適当に愛想笑いをしながらその場をやり過ごそうとするものの、ぐっと距離を詰められて逃げ場がなくなってしまう。
「あ、僕は今日出演している……の、……をしていて……」
視界を邪魔するようにしゃべりかけてくるスタッフさん。
（あー、もううるさいなぁ！　アタシは友希那の勇姿が見たいのにーー！）
本当はこんな人無視しても良いんだろうけど、『マネージャ[illegible]
アタシ[illegible]う目で見られる。アタシの行動が友希那の評判に関わる[illegible]ってある。
「湊さんはいいけど、あのマネージャーさんはちょっと…」なんて思われたら大変だ。だから、できることなら周りの人に良い印象を持ってもらいたい。少なくともマイナスのイメージだけは避けなくては、そう思いながら聞きたくもない会話にそれらしい相槌を打ちながら視界の端っこで友希那の姿を追う。
「ていうか、キミ可愛いよね。マネージャーにしとくには勿体無いっていうかさ」
「……あはは、またまたそんな～」
いつのまにか友希那が歌を披露する順番になっていたようで、ゲスト席からステージへと移動していく友希那。ちょうどCMを挟む形になるようで、ステージに立った友希那はマイクの調節をしながら、キョロキョロと周りの様子を確認しているようだった。
空間の広さ、客席の奥行き、客席の温度、マイクの響きや音の反響はリハーサルで念入りに確認するけれど、やはりそこにお客さんが入ると変わってくる。そのわずかな変化にすぐ対応できるのが本当のプロだ。
友希那はゆっくりと呼吸をし、会場の空気を耳で感じ取ろうとしている。と同時に、客席にいたアタシに気づいたのか、一瞬びっくりした顔をしたものの、アタシの隣にいる人物を見た途端、怪訝そうな顔をする。それはもう苦虫を潰したような顔だった。そして、近くのスタッフに小声で何かを確認するや否や

おもむろにマイクのスイッチをオンにして喋り出すではないか。
「ちょっと、リサ！　あなたそんなところでなにしてるのよ！」
会場に響く不機嫌マックスな声色。
ええ？
いくらCM中とはいえ、友希那は何をしているんだろうか
周りのスタッフもざわめきだす。
「いい？　楽しそうに他の人と会話するのもいいけれど、私の歌から耳をそらすことはここにいる誰であろうとも許さないわ！　というより、あなたに聞いてて貰わないと私が困るの！　なんのために私がテレビ出演引き受けたと思っているのよ……私はあなたのためにっ……。あぁ、もう、だから……、その……」
『ここにいる全員、私だけを見てなさい！』
「……！」
瞬間、スタジオの空気が一気に変わった。
静かに色めく客席。CM中だからこの映像がテレビに映ることはない。けど、ここの空気が完全に湊友希那の独壇場に変わった。
例えるならば、絶対的王者、湊友希那というべきか　この場にいる全員が彼女の姿から目が離せなかった
「友希那……」
友希那の黄金色の瞳がじっとアタシだけを見つめてくる。まるでよそ見をするアタシに忠告するようなセリフ。真っ直ぐに自分だけを見ていなさいという甘い束縛。
ねぇ、そんな顔で見ないでよ。そんな熱い視線送られると勘違いするじゃん。てか、反則でしょ。なに、なんなの。
(アタシはいつだって友希那しか見てないのに……)
見つめ合うこと数秒。
この数秒が永遠のように感じる。
遠くから、焦ったようにスタッフの「し、……CM開け五秒前です！」という声が聞こえる。その声を皮切りに、張り詰めていた糸が一瞬だけ緩む。
友希那は「ふ」と妖艶な笑みを見せると、何事もなかったかのように立ち位置へと戻っていく。
「やばい、かっこいい」とか「痺れた……」とか「ムリ、死んじゃう」なんて黄色い声が客席から聞こえてくる。
どきどき。
心臓は未だ熱を持って鼓動を刻む。
陸に上がった魚のように息が苦しい。
甘い苦しさ。
「それでは、歌っていただきましょう！　湊友希那さんで『陽だまりロードナイト』！」
CMが終わりの合図と同時に司会者の曲紹介が入り、友希那の新曲が地上波に乗せられていく。
圧倒的な歌声、容姿。その完璧な姿にアタシは釘付けだった。
相変わらず隣の人は何かしゃべりかけてきているようだったけど、そんなことどうでもよかった。
アタシは瞬きをすることも忘れて彼女の姿をただひたすら見つめていた。

「お疲れ様でしたー！」
全ての収録を終えたアタシ達。
周りの出演者の人たちや関係者の人たちに軽く挨拶をしていれば、誰かに引っ張られるアタシの右手。見れば、その相手は着替えを済ませた友希那だった。
「ちょ、友希那？」
「いいから、来て！」
ずんずんと引っ張られながら、連れていかれたのは誰もいない関係者専用の駐車場。
早く帰りたいのかな？　でもまだ片付けが残ってるしなぁ。
促されるように車の鍵を開ければ、なぜか運転席ではなく後部座席に押し込まれる。もちろん友希那も当たり前のようにその隣に座って来る。
「ねぇ。ちゃんと私の歌、聞いてくれた？」
「う……、うん。もちろん」
友希那は顔を近づけながら聞いてくる。
(ち……近い……)
「そう。それならいいわ　それと、収録中に隣にいる人に変なことされなかった？　連絡先とか聞かれてない？」
「へ…？」
「他のスタッフさんが言ってたわ。あの人、ことあるごとに色んな人にちょっかい出してるって。だからリサの隣にいるところを見て嫌な気持ちになったの。今日は大切な日なのにって…
友希那は[illegible]、後部座席の[illegible]四角い箱を取り出す
中には可愛い猫のピアスが入っていた。
「これは……？」
「リサ、あなたは覚えていないかもしれないけれど、あなたが私のマネージャーになってくれてから今日でちょうど二年が経ったわ。この二年間どんな時だって私のために身を削りながら駆けずり回ってくれたあなたに私は本当に感謝してる。そのうえで私はあなたに何ができるかしらって、ずっと考えてた……。私自身、あなたの望む姿になれているのかはまだわからないけれど、これからもあなたと一緒にさらなる高みに登りたいって思ってる。それが私にできる精一杯の恩返しだと思ったから。今日のテレビ出演を受けたのもその気持ちからよ。まだまだ苦手なことは多いけれど、リサが隣にいてくれるなら頑張れる、そう感じたの」
友希那の指先がアタシの耳に触れる。体温が上がっていくのがわかった。
大事なものに触れるように、ゆっくりと付けられるピアス。
「っ……」
右耳の次は左耳
優しい指先。
微かに届く友希那の吐息。
その全てに身体が火照っていく。
「カチっ」という音とともに両耳に揺れる猫のピアス。少しだけ冷たい彼女の指先が今は心地よかった。

「うん。思った通り、似合ってるわ」
友希那がアタシの耳たぶをふにふにと弄びながら嬉しそうに微笑んでくる。肝心のアタシは恥ずかしくて至近距離にある友希那の顔を直視できない。
「か……、可愛いね、このピアス。友希那が選んでくれたの？」
誤魔化すようにそう言えば、再び近づいてくる友希那の顔。
「ええ。リサに似ていると思って……。ピアスだと気兼ねなくつけれるでしょう？　一応紗夜にも相談して決めたのよ。リサが気に入ってくれたら良いのだけど……」
「友希那……」
どうしよう　嬉しい　嬉しすぎて泣きそう　こんなサプライズ反則だよ
「その、……あなたの気持ちも十分理解してるつもりよ。ただ、私とあなただと色々と立場もあるから……」
「あ……、ありがとう！　友希那！　アタシっ、すっごく嬉しいよ……　まさか友希那からそんな言葉貰えるなんて……　このピアスも大切にする！　毎日つける！　お仕事も今以上に頑張る！」
アタシは感極まって溢れそうになる涙を堪えながら友希那に抱きつく
本当ならアタシが覚えておかなければいけないことだったのに、まさか友希那からこんなにも素晴らしいプレゼントを貰えるなんて思ってもなかった。
「もう、リサったら……」
友希那の瞳が柔らかく揺れる。同時にまるで大切なものにでも触れるかのように抱きしめ返されるアタシの身体。

「まぁ、いいわ……。今はまだこの距離感が心地いいから……そうでしょう？　リサ……」
友希那が耳元で何かをつぶやく。
「え……？　なに。なにか言った？」
「なんでもないわ。こっちの話よ。さぁ、これから帰って報告書書くんでしょう？　私も手伝うからさっさと帰るわよ」
「友希那ぁ……！　うん！」

鼻歌まじりに車を運転するリサを私は後部座席から眺めるその耳元には先ほど私がプレゼントしたピアスが揺れている。
『どんな時でも自分の存在を感じていてほしい』
店員さんから聞いた話だけど、ピアスをプレゼントするにはそんな意味が込められているらしい
先日、レコーディング室で聞いてしまったリサの言葉。残念ながら、今の私にはまだ彼女の気持ちに応えられるほどの想いはない。けれど、誰よりもそばにいてほしいし、誰よりも大切にしたいと思う。
紗夜には「そういう気持ちを世間では恋というんですよ」なんて言われたけど、そんなのわかるわけがない。だって、こんな気持ちはじめてなのだから。
リサの横顔を見つめる
先程まで腕にいた温かさをまだ身体が覚えている
折れそうに細い華奢な腰。

柔らかい胸
良い匂いのする髪の毛
心地よい体温
「…………」
(なんなのかしら、この気持ち)
そっと胸に手を当てる。

心臓が甘く疼いたのは、きっと気のせいに違いない

第三章『歌姫と雑誌撮影』

ザザーン、ザザーン。
遠くでさざ波の音が聞こえる。寄せては返す波の音。仄かに鼻を擽る潮騒の香り。ふと思い出したように囁かれるカモメの鳴き声。
それは紛れもなく大自然が奏でる子守歌
目の前には青い海。頭上には青い空。私たちを照らすのは眩しい太陽。
そう。ここは……。
「海――――――――――っっ！」
「ちょ……、マネージャーさん！　一般人の方に注目されたら困るので叫ばないでください！」
「あ……、あはは～～」
「…………」
「……すみません……」

先日収録が行われた友希那の音楽番組への初出演は無事大好評で幕を終えることができ、その評判は上々だった。
彼女への他番組への出演依頼やその他CMの依頼、コラボ等事務所への問い合わせはひっきりなし。けたたましく鳴り続ける電話や、山のように届くメールの嵐に弦巻プロダクションもうれしい悲鳴の連続だった。アタシも昼夜問わず埋まっていくスケジュールの量にただただ驚くしかなかった。それに、自分の担当している子がスターへの階段を駆け上がっていく様を目の前で見ることができるなんて、これこそマネージャー冥利に尽きるというもの。いや、アタシがどうこう言う前に、彼女はスターになるべくしてこの世に生を受けた生粋のスターであることに間違いはないのだけれど。
それもそのはず。
あのルックスにあの歌声。いくらテレビの画面越しとはいえ、彼女のあんな熱の籠った歌と美貌を見せられて惚れないやつがいるわけがない。彼女を見た誰もが思っただろう。感じただろう。彼女こそ天性の『歌姫』だと。
歌を愛し、歌に愛される。その口から奏でられる旋律は聴くもの全てを魅了する。その姿はまさに音楽の女神に愛された唯一無二の存在。彼女のことを一番近くで見てきたアタシでさえ改めてそう感じたのだから、友希那のことを初めて見た人にしてみればその衝撃は半端なかったに違いない。だって、今までは極限られた『ライブ』という場でしか彼女の姿を拝むことはできなかったのだ。古参ともいえるデビュー当時からのファンからしても、『メディア』という新境地で彼女自身の露出の場が増えることは大いに喜ばしいことに違いない。アタシ以上に友希那の良さを知り尽くした彼らにとって、脳内は現在進行形でお祭り騒ぎ中のはずだ。
（それに……）
アタシの耳元でゆらゆらと揺れる猫のピアス。これはあの収録のあとに友希那がくれたもの。それもアタシへの感謝の気持[illegible]
今だってあの時の[illegible]鮮明に[illegible]
一生忘れない　ううん　忘れたくない　大切な大切な思い出
本当は自分の気持ちを伝えるのが誰よりも苦手な性格をしているくせに、アタシのために一生懸命言葉を選んで渡してくれたのかな……と思うと、ついつい頬が緩んでしまう。現に、以前友希那を担当していたまりなさんでさえも、そのことを伝えると目を真ん丸にして驚いていたくらいだから、あの行動は本当に奇跡なんだと思う　同時に「やっぱり私の見る目に間違いはなかった！　よくやった私！」ってガッツポーズをしていたのはちょっとよくわからなかったけど。
とにかく！　あの一件からアタシはずっと浮かれっぱなしで、事務所内でも「いつもだらしない表情筋がよりだらしなくなった」と注意を受けることもしばしば。だって仕方がないじゃん。嬉しいんだから。まぁ、せっかく上がった友希那からの好感度をドげないように気を付けないといけないとは思ってるんだけどね。常々。
「もう、リサったらはしゃぎすぎよ。いくら海に来れたからといっても、これは仕事なのだからあまり羽目を外しすぎないように」
海に向かって叫んだあといきなり百面相をし出したアタシに気付いたのか、呆れたように声をかけてくる美少女が一人。
太陽に反射する銀髪に、真っ白な肌。透き通る頬にきらりと光る黄金の瞳。この人こそ、今をときめくアーティスト『湊友希那』だ。
友希那は周りのメイクさんに日焼け止めクリームを塗ってもらっ[illegible]
[illegible]まりにもきれいな海だったからちょっとテンションあがっちゃって……。スタッフさんからも注意されたし、以後気を付けます」
アタシがそう答えれば、友希那はため息を。メイクさんからはくすくすと笑われてしまう。
いけない。いきなり友希那からの好感度が下がっているじゃないか。それに、側から見たらこれじゃアタシと友希那のどっちがマネージャーかわからない。脳内で頭を抱える。
（うう……）
でも、なんだか楽しそうに周りに溶け込んでいってる彼女を見ると、まぁいっかなんて思ってしまう自分もいて。
最近の友希那は弦巻プロダクションの顔としての自覚ができてきたのか、その成長はめまぐるしいほどだ。あんなに嫌がっていたテレビ番組も依頼がかかれば率先して出演すると言ってくれたり、周りの人へも随分と気を遣えるようになった。
今だって、メイクさんと多少のぎこちなさはあるものの必死にコミュニケーションを取ろうとしているのがわかる。贔屓目なしにとても良い傾向だと思う。そんな友希那を見ていると、アタシももっともっとレベルアップして彼女にふさわしいマネージャーにならないといけないと思うし、そうありたいと願う。これからもずっと彼女の隣でその成長を見守り続けたいから。
（アタシ、頑張るからね！）
そんなこんなでアタシ達は本日、御察しのとおり、早朝から

海に来ていた。なぜかといえば、来月発売される音楽雑誌に特集を組んでもらえることになって、その紙面に載せる写真撮影がここで行われるからだ。
青い海に佇む友希那とか、それはもう良い写真が撮れること間違いない。アタシもあとでこっそりオフショットを撮らないと、なんて密かに考えているのは内緒だけど。
「それでは、湊さんよろしくお願いしまーす！」
おそらく新人スタッフさんだろうか。若そうな見た目のスタッフさんの掛け声とともに、撮影準備が整ったことが現場全体に知らされる。その声を合図に友希那も椅子から立ち上がる。
「じゃ、行ってくるわ。前の時みたいにくれぐれもウロウロして変な人につかまったりしないように」
「うう……　まだあの時のこと言う？　心配しなくてもちゃんとここから友希那の勇姿を見てるから」
「そう？　なら良いけど」
友希那は長い髪を少しばかり鬱陶しそうに手で払うと、カメラマンさんの指示に従いながら立ち位置へと進んでいく。彼女の立ち位置は足元が少しだけ水にかかるかどうかという瀬戸際の砂浜の上。さすがに音楽雑誌なので格好は水着ではないけど、青い海に映えるような真っ白なワンピースに麦わら帽子という出で立ちはまさに砂浜に降り立った無垢な少女そのもの。カメラマンさんの目配せでスタッフさんが持っていた大型の日傘がよけられると、太陽の光が待っていましたとばかりに友希那に降り注ぐ。
真っ白な光が真っ白な砂浜に反射して眩しい。思わず目を覆ってしまう。でも、それ以上に眩しいものがあった。何か、なんてわかりきっていることは言わない。
友希那自身だ。
普段はほとんど露出しない穢れなき肌が、あろうことか今は無防備に太陽の下にさらされている。一瞬、おとぎ話の中に出てくるマーメイドが、初めてその足でこの地を踏みしめたのではないかという錯覚さえ駆け抜けるほどの絵面。
肌を掠める海の風に飛ばされないようにそっと麦わら帽子に手を添える姿もこれまた様になっていて。
（キレイ……）
大げさかもしれないけど、そのあまりの美しさにアタシは言葉を失ってしまう。
もちろん、そんな彼女の姿に唖然としているのは自分だけではなかったようで、先ほどまで彼女の肢体に日焼け止めクリームを塗っていたはずのメイクさんや、最後まで念入りに服装の乱れがないか確認していた衣装さん、レンズチェックに励んでいたカメラマンさんでさえも皆言葉を失っていた。
それほどまでに目の前にいる人物の圧倒的なビジュアルに惹かれていたのだ。年端もいかない、たった一人の少女に。それも本来は歌を生業にしている人間にだ。
「あの……、なにか指示を……」
困ったような友希那の声が砂浜に響く。その声でその場にいた全員がハッと我に返る。そして思い出したかのように呼吸が再開される。
「あ……あぁ、ごめんね。えっと、それじゃ、撮影開始しましょう。みんないけるかな？　よし！　まずはこっちに視線くださーい！」

[illegible]
[illegible]
魔法が解けたかのように
「レフ板もうちょっと角度つけて！　そう、いいよ　湊さんはこっちに視線向けてー！」
「は……、はい」
反射板を持ったスタッフさんに器用に指示をしつつ、彼自身は友希那に積極的に肯定的な意見を挟んでいく。普段なかなか聞き慣れない「キレイ」だとか「かわいい」という単語が飛び交う現場。その様に最初こそ戸惑っていた様子だった彼女も、だんだんとペースを掴んできたのか、作り物ではなく自然な笑顔をカメラに向けるようになっていく。それをファインダー越しに嬉しそうに見つめるカメラマン。
「いいねー！　そのまま振り返るようにこっち向いてー！」
光が丁度良い角度で被写体に当たるタイミングで素早くカシャ、カシャっとシャッターが切られていく。
撮る側と撮られる側。二人だけの世界がそこにはあった。それはもう嫉妬してしまいそうなくらいに美しい世界。でも誰にもその世界を邪魔することなんてできやしない。それほどまでに完成された世界だった。
「綺麗だね、湊さん」
「ですね」
隣でアタシと一緒に撮影を見守っていた衣装さんがポツリと言葉を漏らす。その言葉に頷くことしかできないアタシ。
マネージャー職につくまではメイクを担当していたから、こういう現場には何度も足を運んでいる筈なのに、それでも純粋
[illegible]
えばそれだけのことだけど、それだけのことをすることがどんなに難しいことかなんて、見ただけでわかる。たった一枚のために何千、何万といった計り知れないほどのシャッターを押す。それも会ったばかりの人物を相手に。どの表情が正解なんてきっとわからない。でもそれを見つけ出すのが彼らの仕事なんだ。
これがプロの世界か──。そう思った次の瞬間。ふと、友希那の視線がこちらを向く。もちろんアタシはそれよりも前からずっと彼女のことを目で追っていたので、必然的に絡む視線。
あ、と思ったのも一瞬で。
刹那、柔らかく微笑まれる。
張り詰めていたものが全て取り払われたような自然な微笑み。さっきまでの表情も十分自然だったけど、それを凌駕するほどの慈愛に満ちた表情。迷子の子供を見つけた時の親の表情とでも言えば良いのか、それとも赤ちゃんが母親を見つめる時の天使の微笑みとでも言えば良いのだろうか。
そのあまりにも優しい微笑みに再び言葉を失うアタシ。その代わりに周りからは小さい歓声があがる。
「今の表情！　今の表情すごくいいよ！」
遠くでカメラマンさんの興奮した声が聞こえる。
ぼうっとする頭の片隅でかろうじてその通りだと感じる。アタシも最高の表情だと思った。
言葉にできないくらい、綺麗で美しい
なんだっけ、こういうの。ああ、そうだ。人って本当に美し

いものを見たとき、言葉を失うってこういうことを言うんだ、きっと
アタシは目の前で微笑む友希那をただひたすら見つめることしかできなかった。

撮影はすこぶる順調だった。途中で何回かこまめに休憩を挟んではいたけど、このままいけば当初予定されていた撮影時間よりもかなり早くに終わりそうなぐらいだ。
アタシは腕時計を見ながら、さてどうしようかと思う。
(次の予定までは結構空き時間があるしなぁ。この辺りに芸能人が一人くらいさっと紛れることのできる隠れ家スポットでもあれば良いんだけど。そうだ、スマホで調べておこう)
そんなことを思案している折、ふと頭上から声が降ってくる
「マネージャーさん！　結構良い表情も撮れたのでそろそろ撮影を終わろうかと思っているんですが、もしよければ最後にマネージャーさんも一緒にカメラに映りませんか？」
「えぇ!?」
(……何を言ってるんだ、この人は)
そう思いながら勢い良く顔を上げる。だってよく考えてほしい。どこの世界に自ら堂々とカメラに映りこむマネージャーがいるというのだろうか。それも仲間内のオフショットとかならまだしも、プロのカメラマンさん相手に、だ。それこそマネージャーの品格を問われる問題じゃないか。
アタシは「はぁ」とため息をつく。
きっと撮影中ずっと待っているだけのアタシに気を遣って言ってくれたんだと思うけど、生憎その申し出に応えるわけにはいかない。
この世界での主役はあくまでも『湊友希那』であって、アタシはその彼女を引き立てる装飾品でしかない。ここは丁寧にお断りしなければ。
でも、顔を上げた先にいた人物が意外過ぎて思わず硬直してしまう。だって、そのありえない提案をしてきたのはまさかのカメラマンさん本人だったから。
「え……っと、その……。せっかくのカメラマンさんからの申し出ですけど、アタシじゃ色々と役不足というか、ご期待に添えないというか、なんというか……」
「あはは。そんなに謙遜されないでください。さっき、撮影をしていて感じたんですけどね、マネージャーさんを見つめてる時の表情が一番生き生きとしているんですよ、彼女。もちろん、マネージャーさんの顔は映さないようにするのでちょっとだけ一緒に映ってみません？　彼女のために」
「ね？」なんて言いながらにっこりと微笑む彼。
うーん。よくわかんないけど、それで友希那の良い表情が撮れるならお安い御用だし、アタシの顔が映らないなら良いのかな？　……いや、でも一応事務所に確認した方が良いんだろうか。それこそ自己判断で、とか言われそうだけど。なんて思案しているうちにあれよあれよと周りのスタッフさん達に連れられて気付けばアタシもちゃっかり撮影スペースに。
いやいや、待って。まだ心の準備が。
ワタワタするアタシを一人置き去りにして、カメラマンさんは超良い笑顔で「はい、二人とも笑って〜！」なんて簡単に言

[illegible]んですけど……だってアタシ、ただの会社員でただの一般人ですから。
ぎこちない笑顔で仁王立ちをすることしかできないアタシ
そしてその横でそれはもう楽しそうに笑う歌姫。というより爆笑されている。
「ちょっと、そんなに笑うなんてひどいじゃん！　アタシだって今の状況がよくわかってないんだから！」
「だって、リサってばその表情にそのポーズって……ふふっ。とてもおかしいわ」
「ゆっ……、友希那だって最初はガチガチのカッチカチでプロレスラーみたいだったじゃん！　……………ぁ……」
「……言ったわね　覚えておきなさいよ」
「ひぃっ……」
そんな低レベルなやりとりをしながらもカメラマンさんはアタシ達の周りをくるくると回っては楽しそうにシャッターを切っていく。
いや、これただの痴話喧嘩ですけど。これ、ほんとにアタシはここにいて良いんだろうか。
「もう。ほら、肩の力を抜いて？」
戸惑うアタシの目の前には、先ほどまで横にいたはずの友希那がいつの間にかいて、その指先がアタシの両肩に触れる。ポンポン、とまるで子供をあやすかのように
(わわっ……)
思ったよりも近い距離に反射的に後ずさりしそうになる。けど、それを彼女の両手が許してはくれない。至近距離にあるの
[illegible]ん？　なんだか、[illegible]緊張しているのか？　[illegible]
「……うぅ……」
周りの人に見られていることなんてすっかり忘れてるのか、まるで楽屋でのやり取りみたいにつんつんとほっぺたを突っついてくる彼女。いや、まぁ撮る側からしたらこういう素の表情を撮りたかったんだから良いんだけど、さすがのアタシもこれは恥ずかしいよ。
結局、終始ガチガチでしかなかったアタシだけど、なぜか友希那とカメラマンさんは上機嫌で。最終的には二人で仲良く撮れた写真をチェックしちゃってさ。
なんだかアタシだけ取り残された気分だったけど、まぁ相手はプロだしきっと良い写真が撮れたんだろう。そう思うことにした。

◇◇◇

「もう、まだ怒ってるの？」
「別に怒ってません〜」
「怒ってるじゃない。ほら、私のかき氷もあげるから機嫌なおして？」
そう言いながらスプーンを差し出してくる友希那。それを無言で受け取るアタシ。
「どう、美味しい？」

「……うん」
「もう一口食べる?」
「……うん」
って、これじゃほんとにどっちがお世話されてる側なのかわからないじゃないか。
思わず項垂れるアタシ
よくわからないままアタシまで混じることになった謎の雑誌撮影も無事終わり、アタシと友希那は近くにあった小洒落た喫茶店で時間を潰していた。どうやら話を聞くに、この辺りは夏シーズン本番に入れば人でごった返す場所らしいけど、普段は閑散としているらしい。つまり、簡単に言えば穴場だ。
幸いにもこの店の店主さんは陽気なアメリカ人のようで、友希那の姿を見てもとくに反応することもなかった。むしろニコニコと席に案内され、アタシ達は促されるまま一番奥の窓際の席に腰掛け、友希那はこの店のオススメの抹茶味のかき氷を、アタシは蜂蜜たっぷりのパンケーキをそれぞれ頼んだ。
「静かで良い場所ね」
「そうだね」
ぐるりと店内を見渡しても、いるのはアタシ達とこの店の店主さんだけ。時々他のお客さんも来てはいるものの、テイクアウトで商品を持ち帰っているようで店内にまでは入ってこない。
ハワイをモチーフにしているのだろうか、店内にはウクレレを基調とした陽気なBGMと甘いココナッツの香りが広がっている。
「ふふ、見て、これ。さっきね、カメラマンさんに無理言って一枚だけもらってきたの」
友希那は自身のかき氷を口に運びながら一枚の写真を机に並べる。そこにはバッチリ顔の友希那と引きつったままの笑顔を貼り付けているアタシが写っていた。
「なに……ってコレ、アタシの引きつってる顔の写真じゃん! もー! なんでよりにもよってこんな写真貰ってくるかなぁ! もっとビシッと決まった顔のショットもあったでしょ~?」
アタシはそう言いながらハンケーキを口に運ぶ。
「良いじゃない、この表情。私は好きよ? 辛い時や落ち込んでいる時に見たらとても元気がもらえそうだわ」
「……っ! んぐっ、ゲホッ、ゲホッ!」
「ちょっと、大丈夫?」
多分、友希那のことだから会話の流れ的になんの気なしに言ったであろう言葉だったんだろうけど、都合の良いアタシの耳は都合の良い部分だけを切り取って反芻してしまう。
友希那の「好きよ」という言葉を。
危うく飲み込む寸前だったハンケーキを机の上にぶちまけてしまうところだった。
動揺して咳き込むアタシを前に友希那は相変わらず優しく微笑む。
「そんなに急いで食べなくても誰もとらないから。ほら、口の周りにもついてるわよ」
「え……?」
クリームでもついたままだったのかもしれない。彼女の細い人差し指がアタシの唇のほんの少しだけ右部分をそっと辿ると、躊躇することもなくその指先が口に含まれる。「甘いわね」なん

[illegible]
の知らない友希那みたいで
ていうか、なんだかこの空気甘くないですか!?
「……っアタシ、ちょっとお手洗い行ってくる!」
頭が沸騰しそうだった。
キョトンとする友希那を置いたまま店内の表示に従うままお手洗いへと猛ダッシュ。前にもこんなことあったな、なんて思う。
途中何度か足がもつれそうになったけど、こんなところでコケるわけにはいかなかった。
いやいやいや、なに、さっきの。さっき、なにされた? アタシ。あれでしょ? よく少女マンガとかであるやつでしょ? 見開きページで主人公が顔真っ赤にするやつでしょ?
思わず口元を自身の指先でなぞってしまう
「~~~~っ!」
叫びたい気持ちを必死に抑えつつ、トイレのドアを開ける。そのまま乱暴に扉を閉めると、へたへたとしゃがみ込む
「勘弁してよ、もう……」
気持ちを隠さなきゃいけないって思ってるのに、あんな無防備なことされてしまうと勘違いしてしまうじゃないか。アタシと友希那はただの仕事上でのハートナーなのに、その先を期待してしまう自分がいる。こんなの、絶対にダメなのに。
耳元で揺れるピアスをぎゅっと握る。
胸が苦しい。
心臓が五月蠅い
(友希那は純粋にアタシのことをマネージャーとして慕ってく
[illegible]
……!」
必死で言い聞かせる
ブー、ブー。
ホケットの中からは誰かからはわからないけど、電話が鳴り響いている 多分仕事関係の電話だよね、すぐに出なきゃいけないってことも十分わかってる。でも、ゴメンなさい。今はまだ出れそうにないです。あとで必ず折り返すから、今はまだ色々と気持ちの整理をさせてください あと十秒数えるうちに、きちんと湊友希那の専属マネージャーに戻るから
だから、今は……。
深く息を吸いながらゆっくりと数を数える。それに合わせて日を瞑れば、浮かぶのは出会った日の強い眼差しを持った友希那の姿。本当に強い意思を持った瞳だった。アタシの胸を熱くさせた黄金の瞳。その瞳を見て、アタシはあの日友希那に全てを賭けると誓った。二人で未だ見ぬ世界を見るんだと誓ったんだ。だから、その日を迎えるまでアタシはアタシのやるべきことをやり遂げなければいけない。
絶対に。
この時のアタシは、まさかこの一本の電話がアタシ達の運命を変えることになるとは思ってもいなかった。

最終章『今井リサと湊友希那』

『お知らせ

当プロダクション所属アーティストの湊友希那は、この度活動拠点を日本からアメリカへ移す運びとなりました。時期につきましては現在最終調整中で、決まり次第発表をさせていただく予定です。ファンの皆様、突然の発表になり申し訳ありません。どうか、今後とも変わらぬ応援をよろしくお願い致します

二〇XX年XX月XX日』

珍しく『緊急招集』という名目でまりなさんから電話がかかってきたのはつい先日の話。友希那が海での音楽雑誌の撮影を終えてのタイミングだった。

内容は電話では伝えることができない『トップシークレット案件』とのことで、招集日時だけ一方的に告げられ、電話は切られた。

呼び出されたのはアタシだけ。まぁ、この手の招集はよくあることで、少し前の音楽番組出演依頼もその一つだった。

サプライズが大好きな弦巻プロダクションのことだ。今回もおそらく似たようなもので、きっと友希那に大きい仕事のオファーでも来たに違いない。その時のアタシは呑気にそう思っていた

けれど、招集当日、まりなさんに案内されたのはまさかの社長の部屋で。一気に目が覚めた。

「今井さんを連れてきました」

「し、……失礼します！」

部屋の中には神妙な顔をした社長と人事部の部長、そしてアタシの三人。そのあまりにも意外な組み合わせに加え、何とも言いようのない無言の圧のかかった空気感に思わずたじろいでしまう。

そうだ、まりなさんは……。助けを求めて振り返ったものの、目に映ったのは部屋をあとにする彼女の後ろ姿だけ。

嗚呼、無情。バタン、という音とともに外界への唯一の扉は閉ざされ、三人だけの息苦しい密室が完成してしまった。

こうなればもう腹を括るしかない。

「座って」

「ハイ……」

社長に促されるまま黒塗りのソファーに腰掛ける。あ、ふかふかで気持ちいい……、じゃなくって！　思わず深く腰掛けそうになるところを慌てて浅めに座り直す。

アタシは改めて背筋を正すと、話を聞くために顔をあげる。

さぁ、今回はどんな内容で招集されたんだろう。

けれど、意を決したアタシの心境とは裏腹に会話は一向に始まりそうにはなかった。

カチ、コチ、カチ、コチ。

静かな部屋の中で、時計の音だけがやけにクリアに聞こえる。今時珍しい年代物のホールクロック。社長の趣味だ。なんでも、骨董品やアンティーク品に目がないらしい。

自分の給料の何ヶ月分するのか検討もつかないであろうそれに目をやれば、秒針が短針を目指して一生懸命走っているのが見える。一定の間隔を狂うことなく平等に、飽きることなく走り続ける二本の針。それらはいつしか重なり合い、一瞬の逢瀬を経て再び離ればなれになる。果てのないレースが続く。刻が止まるその時まで、永遠に。

（うう……こういう無言の時間、苦手なんだよなぁ……）

冷や汗がたらりと背中を伝う。

多分、これはグッドニュースというよりもバッドニュースの方だ。直感で察知する。そもそも社長室に案内された時点で緊急事態としか考えられないけれども。

ついにマネージャーとして所属タレントへ抱いてはいけない気持ちがばれてしまったのか。将又、自分でも気付かないうち

に仕事で何かやらかしてしまったか。ホラ、雑誌撮影の時に勝手に写真に映り込んじゃったやつ。直近の出来事が思い出される。いや、でもあれは後からきちんと報告したはず……　ともなれば、友希那に何かスキャンダルでも浮上してしまったか。そうなら大問題だ。専属マネージャーであるアタシがついていながら何てことだって話じゃん！

いくつもの可能性が頭をよぎり、思わず天を仰ぐ　だって、どれも現実的に考えてありえそうなことだったから

「今回、君をここへ呼んだのはね――――」

こちらを伺うように見つめてくる社長の目。その色のない瞳にゾクリと悪寒が走る。ああ、これはヤバいやつだ。予感が確信に変わる。

内容によっては土下座のひとつくらいした方が良いんじゃないだろうか。ふとそんな考えがよぎる。

でも、それら全ての考えはアタシの杞憂にしか過ぎなかったようで、わずか数秒後に聞かされた言葉にアタシは言葉を失った。

だって、友希那が『アメリカへ行く』だなんて話、寝耳に水だったのだから

「どういうことですか！　友希那がアメリカへだなんて……

アタシ、そんな話……！」

なんだ？　なにが起こっている？　今しがた社長は何て言った？

予想もしていなかった展開に思わず声が荒ぶる。

「急な報告になってすまない。でもね、彼女とは最初から『そういう契約』だったんだ」

「……『そういう契約』……？　それは、一体……！」

呆然とするアタシとは対照的にどんどん話を進めていく社長。

そこにはアタシの知らない『湊友希那』の姿があった。

友希那がうちのプロダクションに所属したのは彼女が十八歳の時。ちょうど高校を卒業するタイミングでの契約だった。

当時、高校生ながら既に圧倒的な歌唱力とビジュアルを携えていた友希那　もちろん、その実力は折り紙付きで、この業界にいる人間ならば誰もが喉から手が出るほど欲しがる実力だった。

故に彼女に声をかけたのはうちだけではなく、同業関係のほぼ全てのプロダクションが彼女に声をかけたそうだ。その時の光景を社長は異常とも言えると懐かしそうに語った

それこそ、高校野球のドラフト会議で例えるならば満場一致で全ての球団が一位指名するほどの人気ぶり　完全なる一極集中。周りの全てが霞んでしまうほどに。

それほどまでに多くの人間に『欲しい』と思わせる圧倒的な存在感と伸び代。それが彼女にはあった

まだまだ磨きがかかるであろう歌声。

幾分か幼さが残る美貌。

それはまさしく磨けば光るダイヤモンド。

そう　彼女の存在は幾多の可能性を秘めた『原石』だった。

それでも友希那はどんな好条件を掲示されても首を縦には振らなかった。

なぜか？

それは、彼女の中に強い信念があったから。『アメリカで音楽を学びたい』という強い信念が。

なんでも、友希那のお父さんは世界的に有名なバンドのボーカルをしていたそうで、その原点たるインディーズ時代の活動拠点はアメリカだった。

『自由な国で自由に歌う』

何にも捕らわれず、ただ自分たちが信じる音楽を貫く　そんな彼らが紡ぎ出す音楽はプロから見れば不器用なものだったかもしれない　けれども、その不器用さが、尖りが、若者の心を掴みじわじわと世界に広がっていった。それこそ倒れた醤油がじわじわとカーペットに染みていくように、不均一に、じっくり時間を掛け、けれども決して消えることのない彼らだけの音楽を。

そこに目を付けたのが日本のプロダクションだった。それも超大手の。

誰もが憧れるプロへの道。彼らは口説かれるままそのプロダクションに所属し、日本で念願のメジャーデビューを果たした。もちろん活動拠点はアメリカから日本へ。そこで友希那のお父さんはお母さんと出会い、結婚。数年後に生まれたのが友希那だった。そんな背景もあり、友希那は小さい頃から父が歌う姿を見てきた。それはテレビの中だったり、ライブ会場だったり、お風呂場の中だったり

どんな会場でもどんなお客さんでも、目の前にいる人に自分達の音楽を全力でぶつける、それが父のこだわりだった。友希那はそんな父の生き様が好きだったし、同時に憧れでもあった。「いつか私も父のように……」。幼いながらにも友希那がそんな夢を抱くようになったのはもはや必然だった。

でも、いつからだろうか　次第に父の創り出す音楽に陰りが見え始めたのは

メジャーデビューしてから十数年。最初こそインディーズ時代同様、自由な音楽を作っていたはずなのに、曲がヒットすればヒットするほどプロダクション側から求められるのは『もっと売れる音楽を』という声。

自由な音楽と何にも捕らわれない姿勢が彼らの持ち味だったはずなのに、時代とともにだんだんとそれが赦されない立場へと変わっていく

「もっと明るい曲に」

「もっと丁寧な言い回しに」

「もっと親しみがある曲に」

「もっと」

「もっと」

「もっと」……

そんなプレッシャーにも似た無言の圧力の中で作る音楽が、一体誰の心に響くというのだろうか

響かないものは届かない

届かないものは売れない。

売れないものは消えていく。

消えたくないからもがく。

もがくから苦しい。

それは悪循環の始まりだった。

売れないのはなぜか？　流行に乗れていないから？　曲調が一昔前だから？　単調だから？

売れるために売れる曲に似せていく。流行を模倣していく。
そして曲はいつしか『よくある定番の曲』へと。
そんなことを繰り返すうちに次第にファンは離れていき、メンバー同士の心もだんだん離れていった。乖離する理想と現実。そうなれば転がり落ちるのはあっという間で。
『音楽性の違い』。そのたった一言で彼らは解散した。それ以来、友希那の父は音楽という世界に戻ることはなかった。

「そんなことが……」
「その事情もあって、彼女自身があまり日本でデビューすることへのイメージが良くなくてね。『世論』に自分の音楽が潰されてしまうと感じているようだった。スカウトした当初、彼女は『アメリカへ音楽を学びに留学する』の一点張りでね。とても強い意志を感じたよ」
社長はそう言うと、手元にあったお茶を一口する。
「留学……？　じゃあなんで友希那は今うちのプロダクションにいるんですか？」
「それはね、簡単に言えばウチが掲示した条件が彼女を納得させられるものだったからだ。今すぐには無理だけど、彼女のためにアメリカに弦巻プロダクションの支部を立ち上げること、そして立ち上げた後は彼女の活動拠点をそちらに移すことを約束した。もちろん向こうでの生活も日本語と英語の両方が喋れる現地スタッフを用意するし、彼女がしたがっていた音楽の勉強も好きなだけして良い。彼女の思うままの音楽を自由な国で。その代わり、籍だけはうちに置いておいて欲しい、そうお願いした。現に彼女は全ての手はずが整うまでのこの期間、十分に日本での成果をあげてくれた。苦手だと言っていたメディア露出も積極的に取り組んでくれたり、周りの人間とのコミュニケーションだって取れるようになりつつある。十分すぎるぐらいだ。これならどこへ行っても通用するだろう」
――――『彼女がアメリカへ拠点を移すタイミングで、君には元々いたメイク部門へ戻れるよう人事部長にお願いしている。もしこのままマネージャー業務を気に入ってくれているようなら、引き続き別の所属タレントのマネージャーを任せても良い。君の希望を最大限聞くつもりだ。今まで専属マネージャーとしてよくやってくれた。本当にありがとう』
社長と人事部長が今後の人事異動についての話をしてくる。けど、アタシは自分が今置かれている現状についていくことに必死で。
先ほどまでの社長の言葉がぐるぐると頭の中を回る。
えっと、つまり友希那は最初からアメリカへ行くつもりでうちのプロダクションに入ってて、それは極数人しか知らされていないトップシークレットだった。
簡単に言えば、アタシはそのアメリカ行きの準備が整うまでの場つなぎ的な立ち位置のマネージャーだったってこと？　それを知らないままアタシはこの二年と少し、暢気にへらへらと仕事してたわけだ。で、そのアメリカ支部とやらができて、全ての準備が整ったからもうアタシは用済みっていう、そういうこと？
そっか、そっか。なるほどなるほどー。
「……って納得できるかーい！」
自宅への帰り道、誰もいないことを良いことに土手に向かって大声で叫ぶ。

本当のことを言うとここまでどうやって帰ってきたのかも覚えてないけど、習慣とは末恐ろしいもので気付けば足が勝手に動いていた。
怒りにまかせて足下に転がっていた石ころをひとつ蹴ってみる。そうすれば石ころは土手を転がりながら暗い漆黒の闇に消えていく。音もなく静かに。きっと周りが明るくなってからさっき蹴った石ころを見つけてみろと言われても、自分がどの石ころを蹴ったかなんて到底わからないだろう
ふと、その石ころと自分が重なる。
この先、もっともっと空高く羽ばたいていくであろう友希那。そんな彼女から見たアタシはどんな存在なのだろう？　今でこそ隣で微笑んでくれるけど、近い将来、昔を振り返った時に、「ああ、こんな人もいたわね」くらいの数あるマネージャーのうちの一人にしかなり得ないのかもしれない。
「はは…、キツいなぁ……」
友希那がどんな思いでお父さんの背中を見てきたかもわかったし、どんなきっかけでうちのプロダクションに所属してくれたのかもわかった。
わかったからこそ寂しかった。最初から全てを知らなかったのはアタシだけで、友希那は全部わかったうえで仕事をしてたってことだから。
終わりを知っていた友希那と、始まりすら知らなかったアタシ。
結局、アタシは最初から最後まで蚊帳の外の存在でしかなかったわけだ　本当の意味で彼女には全然近づけてなかったんだなぁ
ため息が漏れる
まぁ、あーだこーだ考えたところでアタシも所詮は会社の駒の一つなわけで。英語だってロクに話せないし、アメリカなんて行ったことすらない。その上マネージャーの経験だって浅いわけだし、こんな半人前のアタシをアメリカに一緒に連れて行くなんてこと想定してるはずがないよね。
そもそも、アタシがマネージャーになったきっかけだって人手不足の中での抜擢だった。それも年が一緒だからとかそんな理由　そんなアタシが今更どうこう言える立場なわけがない。それに、『一緒に連れて行ってくれ』だなんてそんな大見得、社長に切れる自信もない。これがまりなさんぐらいのベテランマネージャーだったらきっとわがままの一つや二つ、朝飯前なのかもしれない。でも、アタシにはそんな実力も、覚悟もない。あるのは、ただ「友希那と一緒にいたい」という気持ち。それだけだから。
(良い機会……だったのかな)
このまま友希那の側に居たとして、日々膨らんでいく自分の気持ちを隠し通す自身があったのかといえば嘘になる　きっと、いつかこの気持ちが友希那に迷惑をかける時がくる。ずっとそう感じてきた。だから、これは神様が最後に与えてくれたチャンスなのかもしれない。友希那への気持ちを封印する、そんなチャンス　何も知らなかったあの日に戻る、友希那を知らなかった日常へ。そうだ。そう思うことにしよう。
アタシは気を抜けば直ぐさま滲みそうな瞳をぎゅっと閉じる。
大丈夫。アタシはマネージャー。友希那は商品。いつものよ

うに頭の中で念じる　そして、呼吸　自分の気持ちが溢れそうになった時はいつもこうしてきた　こうすることで自分を戒めれば、だんだんと気持ちが落ち着いてくるから。
　燃え上がるような情熱も、燃え切ってしまえばいずれ灰になる　アタシの気持ちだって、きっとそうだ　そうに違いないんだ。

「……帰るか」

いつまでもここにいたってしょうがない　明日になればイヤでも友希那と顔を合わすことになる　聞きたいことはその時に聞けば良いのだから

　そう思いながら、歩を踏み出そうとした時、ポケットの中の携帯がぶるぶると震える。

『湊友希那』。

ディスプレイに映る名前は今しがたずっと頭の中を占めていた人。

瞬間、ひゅうっと息が漏れる。

メッセージはたった一言。

『今からうちに来れる？』

◇◇◇

「全部、知ってしまったのね？」

「……うん」

あの後、直ぐさま友希那の家へと向かったアタシ。今日は彼女のご両親はご不在のようで、家の中には友希那しかいなかった。

　通されたリビング。もう何回通ったか覚えてないくらい慣れた部屋のはずなのに今日は何故だか緊張してしまう。

緊張を誤魔化すようにソファーに腰掛けると、不意に飛んでくる友希那からのド直球ストレート。この際、変に回りくどく言われるよりもこっちの方がアタシも気が楽だったし、最初から包み隠さずアタシが求めているであろう答えへ繋がる道へと誘導してくれるその優しさが何より嬉しかった。

　友希那は何から話そうかしら、と呟きながら両手にマグカップを持って隣に腰掛けてくる。手渡されたマグカップの中身はコーヒー。夜風に当たり、少し冷えてしまった身体にはちょうど良い飲み物だ

アタシは一言、いただきますと断りを入れてコーヒーに口をつける。友希那はそんなアタシに柔らかな視線を送ってくる

「……本当は、全部踏み台にするつもりだったの　日本での活動は全部、将来アメリカで音楽をするための助走にしか過ぎない、そう思っていた……」

　友希那は言葉を選ぶようにしてぽつりポツリと語り出す。

アタシはその言葉を一言一句聞き逃すまいと耳を傾ける。

「だってそうでしょう？　いつかいなくなるのなら、人との距離も一定間隔を保って、自分のキャパシティ以上のことには目を瞑っていればいい　きっとその方が気が楽だから　リサのことだってそうよ　自分の良いようにあなたを使って、自分がし

たいことだけが出来る環境を作れたら良いって思ってた」

「友希那……」

「でもね、あなたと出会って、あなたと一緒に行動して。いつも全力で私についてきてくれるあなたの姿勢に絆されてしまったのかしらね　自分が思う音楽だけをやっていればいいなんて、そんな浅はかで自分勝手な考えは次第に消えていってしまった。

――『期待に応えたい』。そう思ってしまったの。わかる？　私の父はその想いから自分の音楽を見失ってしまったというのに、なのに、私は……」

　そう呟く友希那の横顔は寂しげで。まるでこの夜に全ての後悔と懺悔を置いて消えてしまうような、そんな錯覚さえ覚えてしまう。行かないで　そんな想いから咄嗟に彼女に手を伸ばしそうになる。けど、彼女はその手を制止し、まだ私の話を聞いていて、と目で諭してくる。

「リサは覚えているかしら。最初にあなたと出会った日のこと……」

「覚えてるよ」

「あの時、私に全てを賭けてくれるって言ったあなたに、随分と扱いやすそうな人がマネージャーになってくれたわって内心思ってたの　ふふ　ひどいでしょう？　なのに、あなたと過ごす毎日は自分が思うよりもはるかに温かくて、心地よくて……。本当はもっと早くにこうなることを言えたはずなのに、気付けば言えない自分がいたわ。言ったらきっとリサは傷つくと思ったから。仕事に対していつも真剣なリサのことだから、私がこんな気持ちで音楽をしていたなんて知れば悲しむに違いないと思ったの。自分でもよくわからないけど、リサにはいつも笑顔でいて欲しかった。だったらいっそ、このまま時がくるまで何も知らない方がお互い幸せなんじゃないか、そんなことばかり考えているうちに時間だけが過ぎて……」

「…………」

そうか。思い返せば今までのこと全て、こうなることがわかっていながら行動していたのだとすれば納得がいく。わざわざアタシにピアスをくれたり、苦手な音楽番組に出てくれたり……、この前だって一緒に映った写真をカメラマンにもらっていたり

　それらは全て、出会った頃の友希那からは想像ができない行動だった。それはなぜか。

　全部、友希那にとっては『最後』だったから　友希那なりのサインだったんだ。心の、サイン。それをアタシは勝手に自分の力量で友希那が成長してくれているだなんて勘違いして。……ほんと、バカだ。

　思わずマグカップを掴む手に力が入る

友希那はそんなアタシの手にゆっくりと自身の手を重ねてくる。

「リサには本当に感謝してる　リサのお陰で今の私がいるのだから。おそらく、今度のコンサートが一つの区切りになると思うわ　そのコンサートを機に、事務所からは正式にアメリカ行きの発表があるはずよ」

「そっか……」

「今まで黙っていてごめんなさい。でも、その上で私は改めてあなたに問いたい。いつか……、いつかお互いの道が分かれるその日まで、私に全てを賭けてくれる？　私の隣に、……いて

くれる？」
　じっとこちらを見つめてくる真剣な眼差し。心なしかその瞳の奥が震えているような気がする。まるで『見捨てないで』とでも懇願するような、そんな瞳。友希那らしくないと言えばウソになる。『意地でもついてきなさい』、そのくらい言いそうなのにそれでもまだアタシに選ばせてくれる。
　ねぇ、友希那。少しだけ自惚れてもいい？
　友希那にとって、アタシは少しでも覚悟を問う存在に値するって、そう思ってもいい？
　じゃあアタシの答えはなんだ？　全部を知った今、アタシの出すべき答えはなんだ？
　そんなの……、答えはもちろん決まってる。アタシの答えはあの日から変わらない
「当たり前でしょ。だって、初めて会った時からアタシは友希那に全部賭けちゃってるから」
　……だから、笑って？

　その日からの毎日は思っていたよりもずっとあっという間だった
　コンサートは本人の希望通り華々しく、最後はまるで彼女の背中を後押しするかのように客席一面に紫のサイリウムが広がった。紫と言えば友希那のイメージカラー。真っ暗なナイトブラックの空間に浮かぶ数万本のヴァイオレッドモルガナイト。息を呑むほどに綺麗だった。
　その光景をじっと見つめる友希那。その瞳はこれまで以上に優しくて……
（そんな表情もできるようになったんだね）
　アタシは性懲りも無く、その横顔にまたひとつ恋をした。

◇◇◇

　コンサートから一週間後。アタシはアメリカへ向かう友希那を見送るために空港へ来ていた。
　あらかじめほとんどの荷物は先に送っているのか、現れた友希那は手ぶら状態。そんな彼女を見ていると、なんだか普段どおり一人でどこかに仕事をしに行くような、不思議な気持ちになる。
「荷物少ないね。忘れ物してない？」
「大丈夫よ。そういうリサこそ、渡したチケット忘れてない？」
「大丈夫！　ちゃーんともってきたから」
　前日に「当日忘れたら困るから」と手渡された一枚のチケット。それは友希那のアメリカ行きのチケットだった。こんな大事なチケットをアタシに託すだなんて相変わらずと言うか何というか。最後の最後まで友希那は友希那だった。
　鞄からチケットを取り出し、彼女に手渡す。
　ほんとは、このチケットを忘れたら友希那は行かないでいてくれるのかな、とか、いっそのこと破っちゃえば……とか考えたりもしたんだ。でも、やっぱりそんなことはできなかった。そんなことしたって、友希那の気持ちが変わるはずがないことはわかっていたから。

「体調には気をつけてね」
「ええ」
「ちゃんとご飯食べるんだよ」
「ええ」
「困ったことがあったらきちんと人に言うこと」
「ええ」
「変な人に話しかけられてもついていっちゃ駄目だよ」
「ええ」
「あとは……」
　矢継ぎ早に心配事が口から出てくるアタシに友希那は苦笑する。
「リサ、大丈夫だから」
「……あ、ごめん……」
　これじゃあ、まるで都会に出向く娘を見送る田舎の母親だ
　アタシはこれが最後だから、と昨晩焼いてきた手作りのクッキーをそっと友希那に渡す
「これ、お腹が空いたら機内で食べて？」
「ありがとう」
　そうこうしている間にも、時間は無情に過ぎていく。友希那が搭乗予定の飛行機に乗るためにはそろそろ最後のお別れをしなければならない。本当はもっとたくさん話をしていたかったけど、万が一飛行機に乗り遅れでもしたら大変だから。
　アタシは友希那を出発ロビーへと促す。
　正面の大きなエスカレーターを上がり、いくつかのお土産コーナーを通り過ぎると見えてくる厳ついゲート。チケットを持っていないアタシはこの先の荷物検査のゲートはくぐれないので、残念ながらここで友希那とはお別れだ。
「じゃあ、行くわね」
「……うん」
　ここを彼女がくぐれば、アタシはもう友希那の専属マネージャーではなくなる。そうなればアタシと友希那のつながりはなくなってしまう。万が一、今後彼女が帰国してくる機会があったとしても、アタシはそれを知らされることすらないだろう。
　チケットを片手にゲートへ向かう友希那。振り返りざまに広がる彼女の銀髪がガラス張りの天井から降り注ぐ光に反射する
　その後ろ姿が、今はとても眩しい。
『本当にいいの？』
　寂しさの中にそう問う自分がいる
　初めて友希那に出会った日、あまりの美しさに目を奪われた。
　初めて友希那の歌声を聞いた日、こんなにも心を揺さぶられる音がこの世にあったのかと泣いた。
　初めて友希那が微笑んでくれた日、嬉しすぎて言葉を失った。
　初めて友希那とけんかした日、泣きすぎて目が真っ赤に腫れた。
　初めて友希那がプレゼントをくれた日、今の自分が世界で一番幸せ者だと思った。

『初めて友希那が』。
『初めて友希那と』。
『初めて友希那に』。

いくつもの友希那との思い出が、一緒に歩んできた軌跡が、たくさんの『初めて』が、淡い炭酸水のようにパンと音を立てて弾けては、瞬く間に消えていく。
「……っ」
まいったなぁ。
離れて仕舞えば未練がなくなる？
会わなければ忘れられる？
時間が経てば綺麗な思い出として風化していく？
本当に？　本当にアタシは友希那への想いを忘れられる？

だって、
身体が、
心が、
魂が、
アタシの全てが、
『友希那を忘れるなんてできない』って叫んでる。

目の前には今にもゲートを通りそうな友希那の後ろ姿。
これで良いのか？
こんな終わり方で良いのか？
想い出の中のたくさんの『今井リサ』が問いかけてくる。
アタシは、アタシは……！
――――『行かないで』。
言葉にするより先に足が動いた
地を蹴る足。伸びる指先。履いてきたパンプスのヒールがリノリウムを弾くようにカツンと音を立てる。コンマ数秒を経て地面に落ちていく仕事用の鞄。通勤の合間に読もうと思ってた文庫本がつぶれたかもしれない。一週間かけて書いた企画書の端に折れ目が入ったかもしれない。でも、そんなものより掴みたいものが目の前にあった。
　アタシよりほんの少しだけ小さい背丈。頬を擽る柔らかな銀髪。華奢な肩幅。その全てを閉じ込めるようにして抱きしめる。
　驚いた様子の友希那がこちらを振り返ろうとするけど、それを阻止するように腕に力を込める。逃がさないように、どこにもいかないように、手繰りよせるように
「ごめん！　やっぱり、イヤだよ。アタシ、もっと友希那と一緒にいたい！　これで何もかもお終いなんてイヤだよ……！
アタシは、アタシは……！」
　今までため込んできた感情が堰を切ったようにあふれ出してくる。もっと一緒にいたい。もっと色んな話がしたい。もっとたくさん笑い合いたい。もっと同じ時を刻みたい。もっと頼られたい。もっと見て欲しい。もっと必要とされたい。誰に？　友希那に。他の誰かじゃイヤだ。友希那がいい。
　年甲斐もなく、脈絡もないまま自分の感情を吐露する。
　本当はもっと友希那の側で彼女を支えたい。他の誰かに彼女の隣を譲りたくない。彼女の『マネージャー』という肩書きは、未来永劫アタシだけのものだ！
　友希那は泣きじゃくるアタシの腕を優しく解くと、正面から抱きしめ返してくれる。ふわりと香る柑橘系の甘い匂い。
　大好きな香りに涙がまたひとつ溢れ落ちる。
「もう、あなたってばほんと泣き虫ね」

そう呟く声色と髪を撫でてくれる指先があまりにも優しくて、嗚咽が止まらない。
「うん　そうだね。アタシ、ほんと泣き虫だよね。自分でもそう思うよ。
「そんなに私と離れたくない？」
「……うん」
「これからも私と一緒にいたい？」
「……うんっ！」
　アタシの返事にだんだんと柔らかくなっていく友希那の口調。
「ほら、もう良いんじゃない？　これじゃあリサが可哀想だわ。このくらいにしておいてあげて？」
　友希那の一言とともに、バタバタと慌ただしい足音が近づいてくる。それも一人じゃなく複数の。まさか、マスコミ？　アタシは慌てて顔をあげる。
　まず眼に映ったのはスタジオでよく見る撮影用の大きなカメラを構える男性。次いで、アシスタントさんだろうか。長いコードが絡まないように必死にカメラさんの後ろを追いかける小柄な男性。
　そして間髪入れずに『チャッチャラー♪』という何とも気の抜けた音楽が鳴り響く空間
　周りの人達も一体何事かとこちらを見てくる始末だ。
　なんだなんだ。この人達は……。
　状況が飲み込めていないアタシ達を取り囲むようにしてやってきたのは何かが書かれたボードを持ったまりなさん。なんでまりなさんがここに……？
　よくよくそのボードを見てみれば、そこには『ドッキリ大成功！』と書かれている。
「……え？　ドッキリ……？？」
　ドッキリってテレビでよく見るあのドッキリ？
　固まることしかできないアタシとは対照的に、目の前の友希那はそれはそれは嬉しそうな顔でこちらを見てくる。あまりに嬉しいのか、カメラの前だと言うのにそのまま頬ずりまでしてくる。
「よかったわ。これで引き留めてくれなかったらきっと悲しくて泣いていたわ」
「え？　……待って。ドッキリって……、え？　ええ!?　どこからがドッキリ？」
「最初からよ」
「最初……!?」
　ずっと前に社長室に呼ばれたでしょう？　という友希那の言葉に膝から崩れ落ちる。え？　最初って、そこから？　ウソでしょ？　待って。本当にわけわかんない
　何がなにやらちんぷんかんぷんなアタシを前に、仕掛け人であろう友希那とまりなさんはカメラに向かって「ドッキリ大成功～！」なんて言っている。
　いや、そんなことよりも。アタシはどうしても確認しておきたいことがあった。
「ほんとに……？　アメリカ、行かないの？」
「ええ。だってドッキリだもの」
　どうやら先日のコンサートもこれまでのことも全て、『もし、所属タレントが海外へ行くことになったらマネージャーはどうするのか』というドッキリ企画だったらしい。いや、普通に考

えておかしいでしょ？　だってコンサートまでやったんだよ？　それに友希那にドッキリを仕掛けるならまだしも、なんでアタシ!?　それをまりなさんに言えば、そこまでするのがテレビ局なんだよ、ほんとすごいよね～なんて呑気な答えまで返ってきて。

もうやだ、テレビ、怖い。

「また依頼がきたら出てくれる？」

まりなさんが満面の笑みでアタシ達を見てくる。

「だめよ。こんな可愛いリサの泣き顔、他の人にこれ以上見せられないわ」

間髪入れずに友希那は答える。その答えに周りからは黄色い歓声が上がる。

「リサ、あなたの気持ち嬉しかったわ。ずっと、大切にするから……」

『好きよ』

「！」

カメラに拾われないように耳元でそっと告げられた甘い言葉。一瞬、自分の聞き間違いかと思ったけど、ぎゅっと絡め取られるアタシの指先。次いでほっぺたに何かが触れる感触。それが何だったのか確認する間も無く、周りのギャラリーから逃げるようにして走り出す友希那。もちろん、片手はアタシと繋がったまま。

後ろからは相変わらず黄色い歓声が続いている。でも、それに振り返ることなくアタシ達は走り続ける。

「ちょ、……友希那!?　これもドッキリ……？」

「さぁ、どうかしら」

「え？　……えぇ!?」

目の前の友希那がアタシに向かって綺麗に微笑む。

（ほんと、ずるいなぁ……。でも、やっぱり大好き）

その笑顔は、歌姫でもなんでもない、年相応の女の子、『湊友希那』の笑顔だった

《了》

『パラドクス』……矛盾。逆説、背理。

後日談

放送は忘れた頃にやってくる。そのことを身をもって知ったのは、友希那のアメリカ行き騒動からしばらく経ってのことだった

都内某所。音楽番組収録現場。

「あ、今井さん！　この前のドッキリの放送すごく評判良かったよー！　上層部からもまた出て欲しいって話があったから、またオファーがあった際はよろしくね」

「……あはは。それは良かったです　でも、次か～……　検討はしておきますね、……一応」

（……はぁ）

これで何度目だろうか。すれ違う人、すれ違う人から掛けられる同じような台詞　それも満面の笑みで　みんな悪気があるわけではないのだから余計に困る。

アタシは静かにため息をつく

原因はわかっている。こうなってしまったのは、一週間前に放送された例の『ドッキリ番組』が放送されてからなのだから

時は遡ること数ヶ月前　何も知らされず、社長室に呼び出された時から全ては始まった　いや、計画自体はもっと前から進んでいたというべきか。そう。アタシが呑気にへらへら笑いながら仕事をしている時に既に水面下では話が進んでいたのだ。

雑誌撮影の後にかかってきた電話　呼び出された社長室。突然告げられた友希那のアメリカ行きの話。そして知られざる友希那の過去

社長から告げられた言葉全てが妙に信憑性のある話で、『疑う』という概念すら抱かなかったアタシ。あまりに突然のことにショックを受け、悩み、そして友希那本人の言葉を聞いてより一層信じ込んでしまった。あの日受けた悲しみは今でも忘れない。

アメリカ行き当日の天気は晴天。今でこそ友希那はその日のことを「よく晴れた、まさにドッキリ日和だったわ」なんて言うけど、その時のアタシはそれどころじゃなかった。

友希那から渡された一枚のチケット。悩んだ末、友希那を笑顔で送り出そうと決意したはずなのに、そのチケットを前にした途端に押し寄せてくる寂しい気持ち。彼女のアメリカ行きを素直に応援したい気持ちとその手を掴んでこのまま日本にいて欲しいと思う相反する二つの気持ちがさざ波のように打ってはかえす　こんな気持ちでは駄目、早く寝て明日は笑顔で友希那を送り出すんだと思っても、気付けば涙で枕が濡れ出る始末。

結局、あの日はほとんど寝ないまま空港へと向かった。

そして迎えた最後の瞬間。泣き腫らした顔は化粧で誤魔化した　ひきつりそうになる顔は奥歯を噛みしめて堪えた　本当はもっと伝えたいことがいっぱいあったはずなのにそれは言霊にはならず、できたのは無難な言葉と作り笑いだけ。笑顔でゲートへ向かう友希那。アタシよりも華奢な肩幅　その後ろ姿を見ながら、もう本当にこれで終わってしまうんだろうかと考えた途端、足下が真っ暗になった。

それまでだって十分に友希那がアメリカへ行ってしまうこと

を理解していたけど、どこか現実味を感じていなかったのかもしれない。アタシは最後の最後、ここにきてようやくそのことが現実なんだと実感した。毎日のように隣にいた人がこの瞬間からもう二度と手の届かない人になってしまう。そう思ったら頭が真っ白になって……。

あとはもう無意識に身体が動いていた。

空港内の、ましてや公衆の面前でおこなってしまった台本無しの恥ずかしすぎる告白劇。『ドッキリ』という言葉で済むのかどうかさえわからないアタシの友希那への想いは止める間もなく溢れ出た　今思えばずいぶんと幼稚な告白だったと思う　思い出すだけでも恥ずかしい。さらに恥ずかしいのはこの一連の出来事がすべてドッキリだったということだ。

最終的に友希那はアタシの隣に帰ってきてくれたけど、その喜びと引き替えにこの騒動は余すことなく電波に乗った。つまり、アタシの醜態が日本中のお茶の間に放送されたのだ。それも土曜日のゴールデンタイムに。

もちろん、放送までの期間に何度も「あのテープだけは絶っつっ対放送しないでください！」と懇願はした。けれど、友希那本人が見たこともないような笑顔で「放送が楽しみね」なんて言うものだから、番組プロデューサーが張り切っちゃって。張り切った結果、『当初は二時間番組の中の一部分だけの放送予定だったんですが、変更で三時間丸まるの放送になりました』との報告を受けた時は驚きを超えてもはや発狂するかと思った。しかもアタシが一番流して欲しくなかった最後の空港でのやりとりはほぼ編集無しのまま放送されるという羞恥プレイ

こうして、アタシはわずか一晩にして『友希那のことが好きすぎる専属マネージャー』としてすっかり有名人になってしまったわけだ。ちなみに、放送後に両親から何度か着信があったんだけど、怖くて未だに折り返せていない。だって絶対からかわれるに決まってるから。

そんなこんなで今日だって、こうして再び生放送の音楽番組収録にやってきたというのに、すれ違う人にドッキリ番組のことを突っ込まれること数回。番組関係者の人から浴びせられる謎の賛辞。他のタレントのマネージャーさん達に「空港での言葉、感動しました！　今井さんはマネージャーの鏡ですね」と言われた時には、恥ずかしさが度を超して、壁にでもなりたい気分だった。

友希那は友希那で、そんなアタシをフォローしてくれるかと思いきや、当時のころを振り返っては『あの時のリサは本当にかわいかった』なんて色んな人に言いふらしているし、周りの人は周りの人でそんな友希那の言動を止めることなく微笑ましい笑顔で見守っているし。

「…………」

この気持ちを何と表現すれば良いんだろう　胸の辺りがむずむずと痒くて、でも決して嫌なむずむずではなくて。嬉しいけどくすぐったいというか。素直に喜びたいけど、気恥ずかしいというか。

このまま友希那を放っておくと、さらなる被害を受けそうだったのでアタシは彼女の首根っこを掴み、楽屋へと押し込む。

「どうしたの？　そんなに顔を真っ赤にして」

友希那はきょとんとしながらアタシの顔をのぞき込んでくる

「だ……誰のせいだと思ってんの！　友希那が会う人会う人に恥ずかしいことばっかり言うからでしょ!?」
「あら」
「あら、じゃないよ！」
　アタシは怒ってます、という顔をしながら楽屋の椅子に座る。
友希那はそんなアタシの様子を見ながらにやりと微笑んでくる。友希那ってば本当にわかってんのかな。何かを企んでそうな彼女の視線から逃れるべく、アタシは次のスケジュールを確認するために手帳を開く。
「えっと、このあとの予定は……」
「リハのあとに雑誌のインタビューを挟んでそのまま本番、ね」
　いつの間にか横から手帳をのぞき込んできた様子の友希那が予定が書かれた文字をなぞってくる。本番用に綺麗にネイルが施された人差し指。新曲のイメージに合わせた淡いハーフルカラー。つつつ、と紙の上を滑る指先がやけに色っぽく見えるのは彩られた爪先のせいだろうか。
　その指先に視線を捕らわれていれば、不意に耳元にダイレクトに彼女の吐息がかかり、身体がびくりと跳ねてしまう。同時に絡まる視線。蜂蜜色の瞳がじっとアタシを見てくる。
「っ……」
「なぁに？」
「なぁにって、……べ……、別に……」
「そう？」
　熱い視線に耐えきれず目線を下に落としたものの、未だに彼女からの視線が肌に突き刺さる。
　なんだかあの一件の後からやたらと友希那の距離が近い気がする。いや、近いのは前々から感じていたことだけど、より一層近くなったというか。心なしかスキンシップも増えてきたような気がするし。別にそのことがイヤというわけではないけれど、友希那の本心は分からず終いだから、どういう意図なのかなって思う部分もある。
　空港での友希那の言葉。態度。仕草。アタシの告白を嬉しかったと言ってくれたこと。友希那から好きって言葉を返してもらったこと。頬に触れた柔らかい感触。手の温もり。眩しい笑顔。全部ぜんぶ鮮明に覚えてる。嬉しかった。幸せだった。多分これ以上ないくらい幸せだった。……例えそれが『番組進行上の演出』だったとしても……。
　番組を作るうえで必ず考えないといけないのはある程度のシナリオだ。もちろん全てが筋書き通りに進むなんてことは滅多にないけれど、おおむねその通りに物語は進んでいく。じゃあ、その限られた『物語』の中で、どこまでが友希那の『本心』でどこまでが『演出』だったのか？　残念ながらアタシにはわからない。
『マネージャー』としてのアタシを大事にしてくれる友希那。『マネージャー』としてのアタシを必要としてくれる友希那。それは仕事をしている中で十分すぎるほど感じている。けど、友希那はアタシ自身を……、『今井リサ』を必要としてくれているのだろうか？
　さりげなく紗夜にそのことを相談してみたら「なにをバカなことで悩んでいるのですか。そんなの湊さんに直接聞いてみれば良いことでしょう」って返されるし。……はぁ。
　それとなしに本人にあの時のことを聞いてみたこともある。

だけど何回聞いてもうまくはぐらかされるし、結局のところ友希那の手のひらで上手に転がされているような気がしなくもない。でも、それでもいいんじゃないかと思ってしまう自分もいる。なんて言えば良いのかな。友希那は仕事の面でも仕事以外の面でもアタシにとって唯一の存在であり、同時に他の誰にも代えられない存在でもある。一般人のアタシから見れば、プロとして輝く友希那に憧れだってあるし、年相応の一人の女性としても彼女の一貫した生き方に尊敬の念を抱いている。そんな彼女に少しでも認めてもらえたということは、アタシにとってこれ以上ない喜びだった。だからなのかもしれない。前々までは、あわよくば友希那と付き合えたらいいなと思う気持ちがあったけれど、今は隣にいれるだけで満足というか、彼女に必要だと思ってもらえただけでも十分というか。多くは望まなくていい。ただ友希那の側にいれるだけでいい。きっとアタシは満たされてしまったのだ。このドッキリ企画を通して。自分にとって大切な人が手を伸ばせば届く距離にいる。そのことがどれだけ幸せなことかを理解できたから。
　アタシは耳元に揺れるピアスにそっと触れる。
「よし！　そろそろ良い時間だね。次の撮影現場まで向かおう」
「……ええ」
　アタシは勢いよく椅子から立ち上がると楽屋の扉を開ける。考え事はお終い。今は目の前のお仕事に集中しなきゃ。
　この後に控えているのは友希那の忙しいスケジュールを縫っての雑誌撮影。先方のご厚意で撮影場所はこの音楽番組収録スタジオのすぐ隣。衣装も音楽番組で着る衣装と同じでかまわないとのことだったので特に用意するものもない。大きな荷物も不要だし、移動もスムーズ。毎回こんな現場だったらラクなのになぁ。
　歩いて五分もかからない撮影現場まで行くと、そこには見知った顔があった。
　肩に少しかかる程度の水色の髪の毛に、緑の瞳。パステルカラーの衣装に身を包んだ人物は、こちらに気付いた途端、ぱぁっと目を輝かせた。
「あー！　リサちーに友希那ちゃん！」
　飛び跳ねそうな勢いで近づいてきたのはウチのプロダクション所属のアイドル、氷川日菜だった。
「ヒナ～！　久しぶりだね！　足、完治したんだ？」
「うん、このとおり！　この件で二人には色々迷惑かけちゃってほんとごめんねー」
　ヒナは自身の足をちょんちょんつつきながらぺこりと頭を下げる。
　ヒナは同じプロダクションに所属する「Pastel*Palettes」というアイドルグループの一員だ。ちなみにモデルの氷川紗夜とは双子でもあり、噂によると紗夜が弦巻プロダクションに入ると聞いて彼女も追いかけるようにしてここに入ったとかなんとか。ファンも認める正真正銘のおねーちゃん大好きっ子だ。
　そんな彼女は数ヶ月前に、足の怪我をしたことが原因で最近までその治療に専念していた。アタシ自身ヒナのことはよく知っているけど、彼女は大抵のことは上手にこなしてしまういわば天才型。そんな彼女が自らのミスで怪我をするなんて珍しいと思っていたけど、こうしてまた元気な姿を見ることができて安心した。

「元気になったみたいでよかった。怪我したって聞いた時は心配したけど、ヒナでも怪我とかするんだなってびっくりの方が大きかったんだよね」
「ちょっとそれひどいよー。そもそもあの怪我だっておねーちゃんのせいなんだよ？」
「紗夜の？」
「そ。おねーちゃんモデルやってるでしょ？　だから休憩時間に彩ちゃんと一緒におねーちゃんが載ってる雑誌読んでたの。そしたら雑誌の中のおねーちゃんてば男の人と親しげに腕組んでたんだよ！　それもあたしの見せつけるように！　そのあとからかな。なんだか急に頭の中がばーんって弾けちゃって、気付いた時には千聖ちゃんとぶつかってたんだー」
　ね？　おねーちゃんてばひどいでしょ？　なんて言ってのけるヒナにアタシは言葉をなくす。
「いや、腕組んでたって……、仕事の中でだよね？　それに見せつけるようにって、そんな大げさな……」
「仕事でも嫌なものはイヤなのー！　それにおねーちゃんのことは表情見れば全部わかるよ。あの時のおねーちゃん、絶対あたしに見せつけてたもん……。なんでわかんないかなー。リサちーはそういう乙女心をもっと学んだほうがいいと思うなー。友希那ちゃんだってそう思うでしょ？　あー、友希那ちゃんかわいそう。こんな鈍感な彼女持っちゃって」
「ちょっと、ヒナ！　アタシと友希那はそんな関係じゃ……」
　ヒナはアタシの隣にいた友希那を見つめる。いきなり話を振られるとは思っていなかったらしい彼女はヒナの問いかけに少し驚いている様子だった。友希那は少し思案したあと、「さぁ、どうかしら」と言葉を濁す。そんな友希那の表情をじっと見つめるヒナ。
「なにかしら？」
「ふーん。それより二人とも時間はだいじょーぶなの？」
「あ、時間！」
　時計を見れば撮影の時間が迫っていた。ヒナの一声ではっとなる友希那。本当はもう少しゆっくりとおしゃべりをしていたかったけど、こちらも時間に追われる身。慌ただしくヒナに別れの挨拶をすると撮影スタジオへと走った。
「じゃあ、撮影が終わる頃にまた迎えにくるから」
「ええ。あの、リサ……さっきのことだけれど……」
「湊さーん、お願いします」
「……行ってくるわ」
「……？」
　友希那を送り届けると、アタシはアタシで来月の友希那のスケジュール表の作成をするために元いた楽屋へと戻る。締め切りは明日のお昼までと言われているけど、なるべく早めに渡せるものは渡しておきたい。それに、こういう雑務は早く終わらせてSNSツールに載せる友希那のオフショットを撮りに行かなければならない。
　アタシは駆け出しそうになる気持ちを抑えながら、怒られない程度に早足で廊下を進む。
　と、その時。
「湊さんのマネージャーさん」
　どこかで聞いたような声が後ろから聞こえる。
「あ、やっぱりそうだ。久しぶり。僕のこと覚えてる？」

（げ……）
　振り向けば、そこにいたのは以前もこの番組でアタシに声をかけてきた人だった。確か、共演者の誰かのマネージャーさんだったような。そうそう。あの時と同じで首から「スタッフ」と書かれた名札をぶら下げていて、目元にほくろがあって。
　前回は記念すべき友希那の初めての音楽番組出演だったのに、この人に随分と邪魔されたのを覚えている。それに今回もまた出会うなんてツイてなさ過ぎる。それに、友希那曰く色んな女の子に声かけてるみたいだし、随分と厄介な人に見つかってしまった。
　アタシは思わず顔が引きつりそうになりながらも余所行きの笑顔を貼り付ける。
「あ、どうも～。お久しぶりです」
「また一緒の現場になるなんて嬉しいな」
「あはは……」
　アタシは全然嬉しくないですけど、と口から出そうになるのを我慢しながら愛想笑いを続ける。
（さっさと会話を終わらせて楽屋に戻らなくちゃ）
　けれど、アタシの思いとは裏腹に目の前の男性はどうでも良い世間話をしてくる。それもやたらと鼻につく言い方で。あぁ、面倒くさいなぁ。仕事柄今まで色んな人に出会ってきたけどこういうタイプの人間が一番やっかいだと思う。職種をステータスみたいに振りかざして偉そうにして。どうやら彼の父が業界で有名な人らしく、そのことを鼻にかけているみたいだ。
「あの～。せっかくなんですけど、アタシこのあとも急ぎの仕事があるので、それじゃ……」
　このままでは時間がいくらあっても足りない。アタシは会話が途切れたタイミングで断りを入れると、その場をあとにしようとする。……が相手も一枚上手でそれを阻止してくる。
「ああ、待って。ね、こうやって再会できたのも何かの縁だし今度一緒に食事でもどう？」
「それは、ちょっと……」
「僕ね、この業界にコネクションたくさん持ってるから、君の担当の湊さんにも新しい仕事紹介できるよ。……逆に干すことも、ね」
「……！」
　ハッと顔を上げれば妖しい笑みでこちらを見つめてくる二つの瞳。下心満載の瞳。『干すこともできる』、彼はそう言った。この業界にいるからこそ、明らかにそういう手口の口説き文句だとはわかる。でも、その言葉に揺らいでしまう気持ちもあった。アタシのことは別にどうでもいい。釣れないマネージャーとでも高飛車なマネージャーとでも罵ってくれていい。でも、本当に友希那が干されてしまったら……？　この男性のことは気にくわないけど、友希那の活躍の場が減るなんてこと想像もしたくなかった。それもアタシが原因でなんてなおさら。過去に人気絶好調だった芸能人が個人的なトラブルで番組を干され、最終的にはテレビの世界から消えてしまったなんて話はよく聞く。一種の都市伝説なのかもしれないけど、もし本当なら？　今まさに軌道に乗って絶好調の友希那。そんな彼女の活躍の場がなくなれば、友希那の今後の可能性が消えてしまう。彼女が一番大切にしている『歌』をアタシが取り上げてしまうことになる。

「……っ」
　卑怯なやり方だと思う。ただ、このまま引き下がってくれるような人間じゃないだろうこともなんとなく察しがつく。食事一回でことが穏便に済むのなら安いものか、ぐっと握り拳をつくりながらそう思う。でも、本当にご飯だけで済むんだろうか。万が一、変なことにでもなったらそれこそ……。
「ご飯に一回行くだけでいいんですよね？」
「もちろん。もし君が僕のことを気に入ってくれたなら何回でも」
　じっと彼の瞳を見る。その表情からは意図はくみ取れない。どうしよう。攻防戦は彼のほうが有利な戦況。この場合に選択するべき最善の答えが見つからない。
　最悪の場合、他の誰かに別のテーブルに座っていてもらってもし何かあれば駆けつけてもらえばいいか、頭の中で考える。ただ、こんなこと友希那に知られたら何て思われるか。下手すればせっかく得られたマネージャーとしての信頼を失うことにもなりかねない。
　万事休すか、そう思った瞬間。

　――――「そういう話なら直接プロダクションに言ってもらえるかしら」

不機嫌そうなアルトボイスが廊下に響く。
顔をあげれば、そこには友希那がいた。
カツカツ、と響くヒールの音。
「え？　友希那……？　雑誌撮影は？」
「とっくに終わったわよ。どこで何をしているのかと思えば……まったく」
　友希那は大股でこちらへ歩いてくると強引にアタシの腕を引っ張る。そして目の前の男ににらみを効かす。
「うちのマネージャーに変なこと吹きかけないで頂戴」
「ははは……」
「リサ、行くわよ」
「う、うん」
　無言のまま連れられるアタシ。それも手を繋がれた状態で。なんだか先日の空港での出来事と重なるな、なんて思いながら行き着いた先は本来の目的地、楽屋だった。
　荒々しくドアを開ける友希那。あまり感情を表に出さない彼女にしては珍しいことだ。察するにこれは相当不機嫌なご様子。どうしようかと思った矢先、ぎゅっと抱きしめられる。
「……、なのよ、あなたは」
「……え？」
「無防備なのよ、あなたは」
　友希那は怒ってるような、困ったような複雑な表情を浮かべる。でも、今のアタシはそれどころではなくて。
　柔らかい、友希那の身体に抱きしめられている。いつもはアタシの方が少しだけ背が高いけど、今日はその逆だった。動きやすいようにとヒールが低めの靴を選んだアタシに対して友希那は本番用のヒールが高めのブーツ。ちょうど友希那の肩口にアタシの顔が埋まる形で抱きしめられている。そのことに気付いたアタシは息をするので精一杯だった。
「ゆ、友希那……？」

「私にとってあなたがどれだけ大切なのかってこと、いいかげんわかって頂戴。それともわかっていての行動なの？　だとしたらあまりにもひどいわ。やっぱり紗夜が言ってた通りきちんと言葉にしなければ伝わらないのかしら」
「え？　え？」
　クエスチョンマーク全開のアタシとそんなアタシを見てため息をつく友希那。
「いい？　きちんと聞いてなさいよ」
　ぽかんとするアタシの頬に銀色の髪がふわりと触れたかと思うと。

――――ちゅ。

　頬に温かい感触。
「！」
「先ほど日菜があなたに言っていたこと、私にはよくわかるわ。私は例え仕事だとしても嫌なことは嫌だし、心にも思っていないことを平然と言えるほど器用じゃない。この前のドッキリ番組のことだってそうよ。私はお世辞でリサのことを認めたわけじゃない。心からリサのことが大切だと思ったからこそ言葉にしたの。それが上手に伝わっていなかったのならこれから善処するわ。いい？　リサは仕事とプライベートは別に考えるようだけれど、私は仕事のつきあいだとしても、あなたが私以外の人と食事に行くなんてイヤよ。愛想笑いだってしてほしくない。私以外の人と楽しそうにしているところなんて見たくもないわ。どうしてだかわかる？」
　友希那がアタシの手の平に指を絡めながらじっとこちらを見つめてくる。
「あなたが……、リサが好きだからよ」
「！」
「好きだから不安になる。特にリサは目を離すとすぐにフラフラするから心配でしょうがないの。さっきだって私がいなければあのまま言いくるめられていたでしょう？　あなたはもっと自分を大事にしなければだめよ。あとはもっと自信を持つこと。この私が惚れたのだからもっと胸張って堂々としていればいいの。わかった？　それとも、あなたの言ってくれた『好き』と私の言う『好き』は意味が違ったかしら？」
「そんなことない……！　アタシも好き！　友希那のことが、好きだよ！　大好きっ！」
「そう。なら問題ないわね」
　友希那はアタシの返事に満足すると、頭を一撫でして顔を近づけてくる。あ、と思った瞬間には柔らかい感触が唇の上を滑る。同時に絡まる吐息。咄嗟に後ろに下がろうと思ったけど、それを阻止される。
「……っ」
「言葉にしなければわからないのならいつでも言うから。だから、私のことだけ見てなさい」
「友希那……」
「それじゃあ、私は本番へ行ってくるから……。リサはここで良い子にして待っておくのよ？　浮気したらシメるから」
「…………ハイ」
　目の前でドアが静かに閉まる。アタシは今しがたされたことに頭がついていかずただただ立ち尽くすのみ。
　えっと、アタシは何で楽屋にいるんだっけ。あ、そうだ。明

日提出のスケジュールをまとめようと思ってたんだった。あれ？　そういえばさっき、なにされた？　っていうか何て言われた？

「〜〜〜〜〜〜〜〜！」

扉の向こうでは慌ただしい喧騒が広がる。その中で身動きすらできず悶えることしかできない自分の身体。

ずるい。ずるいよ。そんなことされたらアタシ、もう友希那のこと以外何も考えられなくなるじゃん。

「バレて社長室に呼ばれた時は責任とってよね……」

誰もいない楽屋でそっと呟く。触れた唇は未だ熱い。その言葉に応えるように耳元のピアスがそっと揺れた気がした。

【おまけ】

『ねー、ねー、おねーちゃん！　友希那ちゃんとリサちーってまだ付き合ってないの？』

『どうかしら。見ている限り時間の問題のような気もするけれど。まぁ、今井さんは意外と鈍感なようだから何かきっかけでもないと難しいかもしれないわね。それよりも日菜、さっきから引っ付きすぎよ。誰かに見られたらどうするのよ』

『えへへー。ごめんごめん。そっか、きっかけねー。あたしね、友希那ちゃんとリサちーが付き合いだしたらWデートしてみたいなーって思ってるんだけど、どうかな？』

『……そうね。考えておくわ』

『わーい！（よーし、あの女好きで有名なスタッフさんを利用しちゃおーっと）』

『……（日菜ってば余計なことしなければ良いのだけれど）』

（『恋心のパラドクス』／終）

あとがき

はじめまして、こんにちは、りょーちゃんと申します。
この度は本書をお手に取っていただき誠にありがとうございます。
今回、初めてのオフセット本ということで、前々から決めていたこのリサゆき芸能人パロを一冊にまとめさせていただきました。リサゆき好きのみなさんはご存じかもしれませんが、私は生粋の友希那受け大好き人間なのですが、この話に至ってはその逆をイメージして書きあげた作品になっています。グイグイいく友希那とちょっと奥手なリサ。どっちも可愛いですよね。この二人はきっとこれからも周りに助けられながら、ちょっとずつ進展していくんだろうなぁと思います。このお話はこれにて完結ですが、まだまだ続いていく二人の日々を妄想しながら私も生きていこうと思います。
最後になりましたが、この度最高すぎる表紙を描いてくださった倉さん、本当にありがとうございました。初めて見たとき、可愛すぎて「はぎゃーーー！！！！！！！！！！」と叫んでしまったことは内緒です。今度またご飯に行きましょうね。
そして何より、いつも温かいお言葉や励ましのお言葉を下さる皆様！　皆様のおかげで今日まで創作活動を続けてこられました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。
リサゆき最高～～！！！！！！

奥付
タイトル：恋心のパラドクス
発行日：2019年3月31日
（スーパーヒロインタイム2019春／バンドリ！スターフェスティバル5）
サークル：アールワイゼロ
発行者：りょーちゃん（Twitter ID:ryochandayo252）
連絡先：ryochandayo25@gmail.com
表紙：倉様（Twitter ID：1stfooom）
印刷所：株式会社栄光様